

Graded Direct Method Association of Japan
Japan Basic English Society

No. 62

News Bulletin

2010年6月

発行：GDM英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会 編集：片桐ユズル

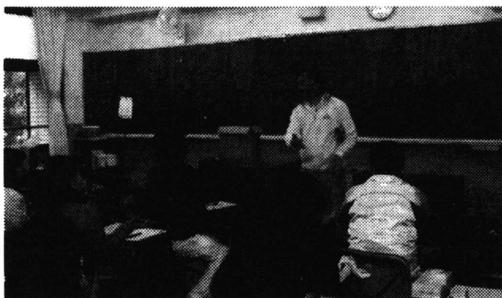
東日本支部 〒226-0005 神奈川県横浜市緑区竹山 3-1-8-3102-233 加藤准子方 Tel/Fax 045-934-8314

西日本支部 〒567-8578 茨木市宿久庄 2-19-5 梅花女子大学短期大学部英語コミュニケーション学科 此枝洋子研究室 Tel 072-643-6221

<http://www.gdm-japan.net/>

GDMと中学校英語 —いろいろな活用事例—

松浦克己



1 はじめに

ここ数年、小牧市教育委員会が企画している夏季の教員研修や自主的な勉強会でGDMの紹介や実践報告を行ってきた。多くの参加者があり、また参加したほとんどの人がGDMの教え方に興味を持ったり、賛同したりしている。し

かしいざ実践に結び付けようとする、そのハードルが高い。理由の一つに教科書と指導順序が大きく異なっていることが挙げられる。(もちろんこれがGDMのメリットでもあるわけだが) しかし昨年、今までにない実践が幾つか行われたので、それらを報告したい。

内 容

GDM と中学校英語—いろいろな活用事例—	松浦 克己	1
GDM 授業の幹と枝葉—検定教科書への移行を意識して—	吉沢 郁生	5
小学校英語活動支援報告 2009	麻田暁枝・河村有里子・此枝洋子・松川和子	8
英語で英語の授業？ そんなの、自分にできるのだろうか・・・	中山 滋樹	19
ゆっくりがいい高齢者クラスのための教材	石井 恵子	22
入門期以降の英語と <i>Basic English</i>	後藤 寛	25
わたしの好きな中級教材	片桐ユズル	37
活動報告		38
編集後記		40

2 実践① 小牧市立応時中学校

2年生の1学期に教える不定詞をGDMで導入するために、4月からどんなことを教えていけばライブで導入できるようになるか、市内の応時中学校の2年生を担当している先生の一人に取り組んでもらった。その内容を紹介する。

まず、自分の立場で言うことに慣れさせるために身のまわりの物の所有を正確に言いながら、その場所を伝える文（in や on）を復習し、自分の答と先生の答がいつも同じでないことを理解させた。次に、take と put のルートセンスが教科書では出てきていないので、will take / taking / took と will put / putting / put を導入した。take と put はライブをするのにはどうしても欠かせない言葉である。つまり日常生活に欠かせない言葉であるため、日本語に訳したときいろいろな言葉になり、全く違った意味をいくつか持つように思えるが、本質的な動きは同じである。そういった意味でもルートセンスを大切にすることが必要である。次に目の前の事実、まさしく自分の目を使ってつかんだ事実を言うのに see という言葉も欠かせない。take, put, see これら3つの語は日常生活に欠かせない、すなわちライブでは必要不可欠な語である。実際の指導の流れは次のようであった。

期日 指導内容

- ① 4/23 This / That my your his her
- ② 4/30 That is his book. It is on his table.
- ③ 5/7 These are his books. They are on his table.
- ④ 5/12 was were
- ⑤ 5/14 This door is open. That door is closed.
- ⑥ 5/25 in on off
- ⑦ 6/2 will take / taking / took

⑧ 6/5 will put / putting / put

⑨ 6/9 see / sees / do not see / does not see

⑩ 6/18 不定詞副詞用法

I will go to the board to see the car in the picture.

He went to the board to see the care in the picture.

①～⑥までは授業のはじめの15分程度を使って指導した。⑦⑧⑨は1時間を使い、ライブ、絵、ワードカード、ワークシートというGDMの普通の流れで行った。

この実践については、夏休みに行われた市内の教師を対象にした研修会で、実践された先生から報告をしていただいた。その時の資料で、授業の様子を次のように述べている。

- ・ライブでは、真剣に聴く雰囲気大切。集中力がないと絶対にできない。「集中力がとぎれて、考えても無理」という雰囲気になってしまったクラスもあった。
- ・正解を誘導して自分が言いすぎてしまった。自信がなくても、生徒が言えるまでもう少し待つべき。ただ、言ってみようとする意欲のある生徒が多いのは救われる。
- ・ワークシートは、班で相談できることもあって、安心した様子で取り組んでいた。友だちに聞いてわかった子もいる。ただし、ワークシートを写して満足してしまう生徒もいた。
- ・GDMをやるなら1年生からがよい。なぜなら、生徒自身に「自分で考えなきゃ、先生は教えてくれない。」と、仕込みやすい。もちろん、やり方次第でいつでもGDMを取り入れることは可能。

そして、次のような感想を報告された。

<GDMをやってみたらこんな生徒が増えたと思います！>

- ・単に「He=彼は」などと意味を覚えるのではなく、場面を考えて問題を解く生徒。

- ・相手のものを指して my～ と行った子がいたら、生徒同士で即ツッコミが入る。話しているのが誰か、何のことを話しているのかを意識して、英文を言ったり、書いたりする生徒。
- ・身の回りのことを、簡単な英語で話せるのが楽しいと感じる生徒。

また次のようなアドバイスを述べている。

【GDMをやってみるには】

- ・GDMを体験してみるとイメージがわく。ただし、思い切ってやってみる勇氣、覚悟があれば何とかなる。やりながら改善できる。
- ・ついつい説明をしたくなるのを我慢。生徒の「意味わからん」「???」という言葉や顔に負けない。
- ・一回やったからわかっているはず、と思わない。忘れるのが当然、という姿勢。
- ・すぐにわからなくても、考え続けたらわかるようになるよ！と生徒を暗示にかける。

3 実践② 金城学院中学校

名古屋市にある私立の女子校金城学院中学校では、昨年度から教科書（プログレス）の授業と並行して、週1時間の英会話の授業でGDMに取り組んでいる。週1時間に加え、英会話の授業も入れなくてはいけないため、時間数は限られているが、次のような内容で行った。

<1学期>

- ① I, You, He, She, It, They
- ② here, there, am, is, are
- ③ This, That, my, your, his, her
- ④ a (my, your, his, her)
- ⑤ We, You, This is a bag.
This bag is here. It is here.
- ⑥ These, Those
- ⑦ in, on, the

<2学期>

- ⑧ its, leg, legs, foot, feet, arm, arms
- ⑨ of
- ⑩ a leg, legs, the leg, the legs
- ⑪ open, closed, see, do not see
- ⑫ sees, does not see
- ⑬ Do, Does, Yes, No, What
- ⑭ has, have,

<3学期>

- ⑮ off, taking, took
- ⑯ will take (taking, took), it
- ⑰ will put, putting, put
- ⑱ was, were, them

GDMの順序では、上記の⑦のつぎは take, put に入ることになるが、2学期はじめは体育大会など行事が多く、週1時間が十分に確保されないため、1時間で完結する内容を優先させた。また教科書では一般動詞の単純現在をまず習うので、see, sees / have, has を先に教えることにした。3学期に連続して時間が確保できるときに、take / put を指導するように順序を変更した。

生徒は慣れるに従って、GDMの良さを感じようになり、次のような感想を書いている。

<⑨の授業>

- ・最近、英会話（GDMの授業）がめちゃくちゃわかってうれしいです。
- ・先週のプラス of the になると分かりやすくなると思います。おもしろいのもっとやりたいです。

<⑩の授業>

- ・最初どうして the がつくのだろう？と一生懸命考えて、それから何回も言っているうちにどんどん分かってきて、とれもうれしく楽しかったです。
- ・the がついた時は分からなくて不安になったけれど、先生の言うことを聞いていたら

分かった。その瞬間がとてもうれしかった。

このように、GDMの本質でもある自分から学ぶ意欲が、しだいに増していく様子が読み取れ、授業の充実ぶりがよく分かる。

4 GDMの成果

小牧西中学校では1年時に、教科書の進度をできるだけ押さえてEP1の42ページのhave/has までを教えることにしている。教科書を進めるときも、できるだけライブで新出語や文を教えるようにしている。(授業内容について、詳しくは2006年のBulletinを参照)

1年で疑問詞の大部分は学習する。普通の教え方では「場所を聞くときは where , 時間を聞くときは when ・ ・ 」といったように説明をして理解させてから、教科書の本文で確認をして、プリントや問題集で練習する。多くの学校が実施している標準学力検査(NRT)で、昨年度の2年生を対象にしたもので、疑問詞の問題が5問出題されていた。形式は文頭の疑問詞を疑問詞の一覧表から選択する形で、日本語訳もついている(たとえば「いつ・・ですか」「どこで・・」のように)ので、一般に多くの教室で行われている授業の形式にそった内容である。この5問の全国平均正答率は、53%から76%までの平均62%である。それに対して

GDMで指導されてきた小牧西中学校の正答率は、86%から95%までの平均90%であった。このことから、説明をして練習という授業スタイルでは、おおよそ3分の2の生徒は理解させることができる。それに対してGDMを取り入れていくことが、いわゆるスロー・ラーナーズに定着させることに効果があると言える。

5 2010年度の始まり

小牧市には中学校が9校あるが、そのなかで5校が今年度1年生で何らかの形でGDMを授業に取り入れている。1校は小牧西中学校のカリキュラムを参考に、同じような流れで1年間指導していく予定で始めている。2校が1年生の全学級で、教科書に入る前に数時間をGDMで教えている。内容は「I, You」から「This, That, my, your, his, her, a」までを扱っている。残りの1校は、学年全部ではないが、学年の進度と調整をつけながら、GDMのはじめの数時間を実施し、その後教科書の指導においても、ライブを有効に使っていくようにしていきたいと考えている。

このようにGDMを少しでも取り入れ、より良い授業作りを目指している教師が増えている。この流れがこれからも続いていくように、少しでも働きかけを続けていきたい。

(小牧市立小牧西中学校教諭)

GDM 授業の幹と枝葉 — 検定教科書への移行を意識して —

吉 沢 郁 生

Graded Direct Method (以下 GDM) は強いシステムを持った教授法である。指導手順、教材配列のどちらが欠けてもそのシステムは効果を表さない。だから、検定教科書を使わないといけない学校現場の場合、自分の裁量にまかされる時間を確保し、その中で GDM をできる所まで行うことになる。本稿では、中学校の1年生から始めるという設定で考えてみる。

例えば、1学期の終りまでに Lesson〇〇まで進みましょう、それまでは各自の裁量でやりましょう、というふうに他の教師との間で合意ができればしめたものである。週3時間で1学期に30コマほどの授業があるのなら、*English Through Pictures* (以下 EP) Book 1 の30ページまで進むことが可能だ。授業進行のプランを示す。

- 1 I, You, He, She, It, They を教える。
- 2 He (She, It) is here/there. を教える。
- 3 I am here. You are here/there. を教える。
- 4 We are here. You (They) are here/there. を教える。
- 5 This/That is his/her … を教える。
- 6 This/That is my/your … を導入し his/her と合わせて練習する。
- 7 his/her/my/your と対比して a を教える。
- 8 一つの場面について複数の文を作る練習。
This is a table. This table is here. It is here.
- 9 This/That is … と対比して These/Those are … を教える。
- 10 前置詞 in/on を教える。定冠詞 the を導入

する。

- 11 複数の主語で in/on の練習。right/left も教えておく。
- 12 on と対比して off を、続けて taking と took を対比して教える。
- 12 will take を加えて TAKE を練習する。
- 13 will put, putting, put を教える。
- 14 TAKE と PUT をまぜながら練習する。目的格の it を教える。
- 15 衣類の着脱の場面で take … off. /put … on. を教える。
- 16 複数形 men, women, 所有の -'s を教える。
- 17 will give, giving, gave … to (Name) を教える。
- 18 GIVE の練習。人称代名詞の目的格 him/her/me/you を教える。
- 19 物質名詞 water, 接続詞 and を教える。
- 20 his/her と対比して its を教える。
- 21 前置詞 of を教える。
- 22 a と the を対比して教える。
- 23 will go / going / went を教える。
- 24 前置詞 at を教える。
- 25 What …? を教える。
- 26 Yes-No question と答え方を教える。
- 27 疑問文の練習。
- 28 発表
- 29 検定教科書
- 30 検定教科書
- 31 検定教科書

ここに示したのは、その時間の新出事項であって、授業でそれだけを扱うという意味ではな

い。例えば第 16 時間目は「複数形 men, women, 所有の -s を教える。」となっているが、授業ではそれを新しく導入しながら、それまでに教えた be 動詞や TAKE, PUT, 前置詞 in, on もたっぷり復習するのである。(だから、GDM を知らない教師にこの進度表をいきなり見せても誤解を生じるだけである。「それしかやらないのか」とか、「進行形と過去形を同じ時間に教えるなんて無駄だ」と言われるのがオチである。)

検定教科書はどう扱うか。Lesson のすみからすみまで扱おうと思うと時間が足りなくなる。定期テストでどのような設問をするのかをまず考え、それに必要なことを中心に授業を組み立てるのである。例えば、単語のアクセントを問う問題、Lesson の本文の穴埋め問題、target の文型について日本語を英文に直す問題・・・があるとしたら、その問題に答えられるような対策を授業で行うのである。GDM の授業ではないのだから日本語も使う。もちろん問題そのものを教えるわけにはいかないし、授業の持っていきかたには工夫がいる。しかし、GDM とは違う形式の定期テストをする場合はそれを教えておかないと生徒は混乱する。

教師のなかには、このようなやり方にうしろめたさを感じる人がいるかもしれない。他の教師のように、検定教科書本文についても oral introduction をやり、ペア・ワークをやり・・・という授業をしたい、と思うかもしれない。その場合は、検定教科書に費す時間をふやし、EP に費す時間を減らすことになる。その折合いをどうつけるかは、教師の選びである。

私は、EP Book 1 の 30 ページまでに英語の基本がつまっていると思うので、そこまで進むことを第一の目標とする。身体を通さないやり方で、検定教科書の単語や文章を何度も言わせたりするよりも、身体を通して、人称代名詞(主格, 所有格, 目的格), be 動詞, S+V+O の文

型, 時制, 疑問文, 前置詞 in, on, off, to, at などやっておく方が良い、と考えるからだ。(ちなみに、もう数時間 GDM をやる余裕がある場合、私であれば、see, sees, do not see, does not see, そして have, has をやって検定教科書に移る。)

大事なことは、「はじめは検定教科書は開かないけれども、その中身をほかの教材をつかって丁寧に教えます。1 学期の終りには期末テストがありますから、教科書を開いて勉強します。だから安心してついてきて下さい」というふうに生徒に伝えておくことである。(あるいは検定教科書に移るときに説明してもいい。)授業のシステムが変わるときは、きちんと生徒に説明して納得させないといけない。

1 年間、またはそれ以上、自分の裁量で授業を行える場合でも、検定教科書への移行についての見通しは必要である。EP では扱われていないが、検定教科書では扱われている語・文型で重要なものについては、考慮する必要があるからである。

私が以前中学 1 年生を受け持ったときは、学年全部の生徒に教えることができた。週 4 時間 EP を使って授業を進め、中学 2 年生に持ち上がり、6 月中旬で Book 1 を終えた。(週 3 時間なら 10 月頃までかかっただろう。)その後、中 2 の検定教科書に移った。

その際、EP Book 1 には出ていないが、中 1 の検定教科書には出ている語・文型があった。助動詞 can, 一般動詞 eat, wash, clean, want, like, sit, read, write, study, play, talk, listen, watch, sleep, know, live, look, use, speak, fly, swim, walk, 疑問文 How ...? How many ...? などである。(10 年ほど前の実践であり、現在の中 1 の検定教科書では事情が変わっているはずである。)これらの語・文型は EP Book 2

で導入されていたり、そうでなくても *live situation* や絵を使って簡単に導入できるものが多い。私は、EP を真似てこれらの語を導入するテキストブックを作成し、何時間かを使って教えた。(1)

GDM の指導手順の原則は確立されている。日本語を介さず SEN・SIT で意味を提示すること。そして、Review→Live situation による口頭導入→絵を使っての練習→文字の導入→書く練習までを1コマの授業で行うこと。これは木にたとえれば幹にあたる部分であり、これを崩すと GDM ではなくなってしまふ。しかし実際の授業では、それ以外にも教師はさまざまなことを行っている。木の枝葉にあたる部分である。学校ではクラスサイズが大きく、さまざまな生徒たちがいる。その生徒たちをコントロールして、あきさせずに引っ張っていくためのスキルが必要である。以下にいくつかのポイントを示す。

- 1 ノートやプリントの使い方。GDM では毎時間書くことをさせる。その場合、プリントにやらせるのか、ノートに書かせるのか。それはその時々で違うのか。ごく少人数のクラスであれば、書かせている間に見てまわってチェックできるが、クラスサイズが大きいとやり方を工夫する必要がある。ノートを時々集めるとか、プリントを回収してチェックするとか、生徒自身にチェックさせてから集めるとか。大事なことは、あまり手間のかかる方法は長続きしないということ。そして、自分なりの安定したやり方を決める、ということだ。
- 2 家庭学習のやり方。授業で新しい語・文型に出会い、練習する。しかし定着のためには、家庭での復習があった方がいい。プリントを

与えるとか、課題を指示するとか工夫するとよい。

- 3 *Slow learners* への対処法。一対一であれば何とか理解できるが、集団の中にとそれが難しい子がいる。落ち着きのない子もいるだろう。そうした子供たちをどう支えるか。教師がときどき一対一で教えるとか、ペアで教えあうチャンスを作るとか、工夫がいる。
- 4 授業に対する逸脱や妨害が起こった場合。授業を中断して注意することが大事である。はっきり *teaching* とは区別した態度をとること。ことがおさまったら、「じゃ、授業にもどろう」と言って、授業を再開する。
- 5 ペアワーク。教師の示した *situation* で導入し練習した後、ペアで言わせる練習ができる。生徒から見た *You* がいつも教師ではなく、生徒どうしになる場面を作ること、授業に変化ができる。さらに、ペアワークでやっていることを、まとまった形でみんなの前での発表につなげることも可能である。生徒の自由な表現意欲が刺激される。
- 6 創作ノート。GDM では必ず絵に対応する英文を書かせる。場面を常に意識しているので、ノートを持たせ、自由に絵と英文を書いてもらんと指示すると、いろいろな作品を生徒は書いてくる。創作意欲が刺激される。(2)
- 7 個人を指名すること。GDM では生徒が自発的に発言することを育てる。しかし、生徒の自由な発言だけにまかせていると、特に大勢の生徒のいるクラスサイズでは、口下手な生徒や声の小さい生徒が置き去りにされがちになる。そういう生徒にもスポットをあて、きちんと理解できているかどうかを見ることが大切である。
- 8 リーディング教材。EP とは別に、教わった語・文型で読める教材があるとよい。GDM 用には *Happy Reading* がある。生徒の作っ

た作品に手を加えて、絵と英文の教材を作っておくのも一つの方法である。

- 9 音声指導。文字の導入が終わって、板書した英文や EP を音読するときは、発音、ストレス、イントネーションを意識した指導をする。教師がモデルで読む場合はもちろん、生徒に読ませるときも、じょじょに言い直させて、意識をもたせていく。

大切なことは、教師が生徒とのやりとりのプロセスを楽しむことである。ぎくしゃくすることも含めて、教師と生徒、生徒どうしのやりとりの体験そのものに意味がある。教師がそのようなスタンスを失うと、指導手順が結果を出す

ための手段となってしまう、授業は硬直した退屈なものになっていく。

(甲南高等学校・中学校)

<注>

- (1) 吉沢郁生「*English Through Pictures* を応用した教科書作りの試み」『甲南英語通信』第 8 号 (甲南高等学校・中学校,1998)
- (2) 吉沢郁生「絵を使った自由英作文の試み」『甲南英語通信』第 4 号 (甲南高等学校・中学校,1991) 吉沢郁生「英語の絵本を作る」『甲南英語通信』第 9 号 (甲南高等学校・中学校,1999)



小学校英語活動支援報告 2009

麻田暁枝・河村有里子・此枝洋子・松川和子

2009 年度に茨木市立豊川小学校で 5・6 年の英語活動の支援を麻田・松川・河村・此枝のメンバーで実施した。これはその報告である。

1. 豊川小学校での「英語」実施状況

小学校 5・6 年の「英語」が 2009 年度 4 月から始まり、2011 年度には年間 35 時間実施の方向が定められている。茨木市立豊川小学校でも 2008 年度に此枝が 6 年の英語活動の講師を 6 回担当したが、2011 年に向けて 2009 年度からは実施時間を増やしてゆきたいとの希望があった。同校では、2009 年度は年間 20 回の英語活動を計画し、その中で 5・6 年とも外国人講師が 9 回、5 年では担当が 5 回、その他は GDM による指導を実施した。豊川小学校は、5 年 1 クラス・6 年 2 クラスという小規模校で

あり、GDM の活動では、5 年は松川・河村が交互に指導と観察をし、6 年は麻田・此枝が 1 クラスずつ担当した。GDM による活動は、結果的には年間で 5 年は 8 回、6 年は 11 回行った。

毎回の授業は実施状況表のような進度で、毎回レッスンプランを作り進めた。活動の内容は、復習、ライブでの導入、練習、絵で確認、文字を示し、最後はワークで書くこともするという流れであった。5・6 年共、復習を十分に行った。特に活動の間隔が開いた時は、復習に多くの時間を費やし、新項目の導入を抑えるようにした。

2. 6 年の英語活動について

6 年の 11 回の活動の実施状況は表 1 の通りである。

表 1: 6 年 実施状況表

回	実施日	新出項目	ねらい等
1	6/4	I, You, He, She, It, They	自分の立ち場で話す。手をつける。よく聞く
2	6/11	is, here, there	here, there の違いがわかる。文章。ピリオド
3	7/2	am, are	復習を十分に。is, am, are の使い分けができる
4	7/23	We, They	We, They の理解。is, am, are に慣れる
5	9/10	This, That	復習を十分に。This, That の感覚をつかむ
6	9/17	my, your	復習を十分に。my, your の使い方がわかる
7	11/12	his, her	復習を十分に。his, her の使い方がわかる
8	11/19	a	復習を十分に。a の使い方がわかる
9	12/3	These, Those	復習を十分に。複数、These, Those の使い方
10	12/10	——	復習を十分に。発表の練習
11	12/17	——	児童が自分の使える英語で発表

6 年は、1 学期（6～7 月）に 4 回、2 学期（9～12 月）に 7 回の活動を実施した。この学年は GDM での英語指導は初めてであった。1 回目から、発話の時は手を付けて言うように指導した。児童は、初めはやり方に戸惑いを示し、声も小さかったが、慣れてくると声が出るようになった。

7 月の 2 回はプール後の疲れや終業式前日の暑さと闘いながらであった。さらに、9 月の 2 回は運動会練習の疲れや他学年のダンス音楽が響く中での英語活動という厳しい状況であったが、復習を十分にしながら児童の理解を最優先に指導を進めた。児童は概して良く頑張っていたと思う。最終回には全員が自分の言える英語で発表をし、学習の成果を感じることができた。

すべての活動を通して、気づくことは、復習の大切さ、リーディングプリントや発音指導の必要性、担任とのコミュニケーションの重要性である。

(1) 復習の大切さ

4回目から5回目までは7週間、6回目から7回目までは8週間のブランクがあった。そのような時には、既習事項を思い出すために復習を多く行った。

また、毎回の活動後に、次回の活動内容を麻田・此枝の2名で相談して決めた。児童の理解が不十分と思われるところは復習で補った。例えば、7回目では新出項目のhisとyourとの使い分けで問題がある児童が目についたため、8回目に復習でhis, her, yourを十分に扱った。

表1の「ねらい等」を見ると、5回目以降には続けて「復習を十分に」と記されている。活動が復習により支えられていたことがよくわかる。

(2) 復習のためのリーディングプリントの必要性

2・3回目に、いきなりライブで復習を始めると、前回のことを思い出すのに時間がかかり、反応が悪いくことに気付いた。そこで、前回のワークを最初に皆で音読した。しかしながら、各自のワークが完全でない場合もあったので、ワークと同じような様式で、前回の授業を反映したリーディング教材を用意した。それを皆で読んでから、ライブの復習へと入っていくと、反応が良くなった。前回やったことを思い出すのに良い機会になったようだ。

(3) 発音指導の必要性

“there”の導入の時“th”の音がうまくつかめず、「デ?ゼ?なんていってんの?」という声。そこで、“there”を何回も練習した。“her”の音も同様に練習。日本語にない音は取り上げて練習する必要がある。

(4) 担任とのコミュニケーション

担任の先生にはビデオ撮影でお世話になった。活動の途中で、担任は適宜、児童に必要な注意を与えたり、ワークシートの○付けなどを手伝ってくださり、とても助かった。しかしながら、担任には事前に、活動中に担任にしてもらいたいこと、例えば、日本語で説明をしないでほしいことなどを我々が説明しなければならなかったし、そのような説明のための時間が必要であった。しかし現実には、話し合いの時を持ちたいと思いつつも、担任の忙しそうな様子に、なかなかそれを強く要求することができなかった。

英語活動の講師にとっては児童とのふれあいが授業のみに限られ、児童一人ひとりを理解して接するところまで到達できなかった。2組の場合、担任からの申し出があり、それに従ったことで皆が前向きになり、積極性が増した^{注1}。担任の助言は非常にありがたい。

1組の場合、授業中、ライブを見ていなかったり、導入のモデルとして教室の前に招いても出てこない児童が何人もいた。「はい、こっち見て」などと言っても効果がない。ライブを見ない児童をひきつけるのに大変苦労した。叫び出したり教室から勝手に出ていく児童には担任は対応してくれたので、ライブを見ない児童に対しても、担任にもっと協力を求めればよかったのかもしれない。

今後の活動では講師と担任との共同作業であると考え、児童の成長のために話しあいの時を必ず持つ必要がある。

3. 5年の英語活動について

表2： 5年 実施状況表

回	実施日	新出項目	ねらい等
1	6/1	I, You, He, She, It	自分の立場で話す。手をつける。よく聞く。
2	6/8	is, here, there	here, there の違いがわかる。文章で表現する。
3	6/15	am, are	主語によって動詞が変わることがわかる。
4	6/26	This, That	復習を十分に。This, That の感覚をつかむ。
5	7/3	my, your	復習を十分に。my, your の感覚をつかむ。
6	2/19	They	here, there の総復習。They を理解する。
7	2/22	We are here. You(pl.)	am, are に慣れる。We, You(pl.)を理解する。
8	2/26	まとめと作品づくり	復習を十分に。習った文で4コマストーリーを作る

上記の表のとおり、5年は2009年6月～7月に連続して5回活動を実施した。が、その後は、小学校の諸事情から6回目が7ヵ月後の今年2月半ばとなり、続けて7回目・8回目の活動となった。6年と同じように5年の児童たちも1回目の活動日には緊張し、声が小さく遠慮がちだったが、回を追うごとに、少しずつ声も大きくなっていった。いずれの回も児童たちはよく活動に参加し、頑張ったと思う。最後の8回目の活動日には4コマのストーリーづくりに一人一人が一生懸命取り組む様子が見られた。この項では5年の活動の留意点やストーリーづくりについて述べてい。

(1) より復習を多く、児童の理解度に添うよう心がける

時間内に全員が理解できるよう、導入項目を少なく、6年に比べてさらに復習に重点を置いた活動を行った。また児童の反応や発話を観察し、難しいと思われる項目にはより時間を取り、臨機応変にプラ

ンの軌道修正を行いながら活動を行った。例えば、6回目は前回から7ヶ月以上経っており、初回に近い状態が予想されたので、復習を指導の80%とした。そして残すところ2回となった段階では、予定していた項目の導入はせず、これまでの学習の総まとめとしての4コマストーリー作りを決定し、それに向けて7回目の活動を行った。

(2) 文字と文章に慣れる

最終回の8回目は、作品づくりに取りかかる前に、まずワードカードを使ったビンゴゲームと拡大プリント（既習事項）を用いたリーディングを行った。この2つのツールは、文字や文に慣れさせるという意図のもとにとりいれたものだった。

これまでの経験から、プリントを児童に配布し、全員で読む練習をすると何をやっているかわからない、どう読んでいいかわからないといった反応の児童が必ず見受けられたので、今回はプリントを模造紙大に拡大し、全員が顔をあげ、同じものを見ることで、読む箇所を確認しながら練習を行った。児童は前を見て大きな声で読みあげていた。

またビンゴ_{表2}では、該当する単語がわからない児童は友達や先生に聞いていたが、皆楽しくゲームをすすめていた。

(3) 作品づくり

作品づくりにあたっては4コマストーリーの実例を示した。配布する白紙のワークシートをこれもまた模造紙大に拡大し、文を紙で隠した絵を順に貼っていきながら、どのような絵と文で4コマのストーリー構成になっているか児童に考えさせた。そして絵や文の参考となるように先述のリーディングプリントを各自に配り、オリジナルの作品を作らせた。作品は資料1参照。

(4) 担任とのコミュニケーション

6年と同様に担任の先生にはビデオの準備と撮影、ワークの〇付け等で手助けしていただいた。児童たちは学習に向かう姿勢ができており、また先生も一緒になって声を出し、活動に参加してくださったので指導しやすい学年であった。しかしながら、英語講師と担任の先生との話し合いの時間はほとんど無く、こちらの要望を伝えたり、児童の様子や活動についての話し合いを持つことはできなかった。

4. 英語活動の結果について 児童のアンケート結果から

5・6年児童に、7月最終回と活動最終回にアンケート（資料2参照）を実施した。両学年とも、「楽しかった」（「とても楽しかった」「楽しかった」の合計）が活動最後には7月の結果よりも増大した。

「難しかった」は7月よりも増えているが、「楽しかった」が多い結果から判断すれば、児童が「がんばった」という達成感を味わっていると考えられる。実際、5年のアンケートの感想欄には、「たのしかったしむずかしかった。これからもがんばりたい」「むずかしかったけどがんばれた」のような感想が多くみられた。

5年で「難しかった」が活動最後に69%もあるのは、7月から2月までの長いブランクが大きく影響していると考えられる。しかしながら、復習を十分に行い、ビンゴや4コマストーリーを入れるなどの工夫で、児童を活動にひきつけ、それが92%の「楽しかった」という回答に結びついたのである。感想欄にも「前にやった時に習ったことを忘れとったからあまりわからなかったけどなれたらわかるようになってたのしかった」のような記入がいくつも見られた。

わからない時は、両学年とも「友達に聞いた」が最も多い。これは、豊川小学校全体で取り組んでいる「学びの共同体」のグループ学習の指導が影響していると考えられる。「友達に聞いた」は、6年よりも5年の方がその割合が高い（5年：7月59%→2月77%、6年：7月45%→12月53%）。

わからない時についての問いで、両学年の7月と最後とを比べてみると、「先生の言うことを良く聞く」「何かヒントがないか、自分で考えようとした」は両学年とも減っているが、特に「何かヒントがないか、自分で考えようとした」では5年の減少幅が大きい。（5年：7月17%→2月4%、6年：7月29%→12月20%）これは、5年の2月の活動が長いブランク後の3回だけという非常に短期間の活動であったため、児童がじっくり自分で考えることが難しかったためではないかと考える。

5. まとめ

2009年度の豊川小学校での英語では、途中の長いブランクなどでの困難はあったが、復習を中心に指導をし、英語のコミュニケーション活動を進めることができた。

文部科学省の小学校学習指導要領解説の外国語活動編では、外国語活動の目標は『コミュニケーション能力の素地を養うこと』『積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点』とされている。この実践ではGDMによる指導で、児童自身が気づき、発話し、他の児童の発話からも学びつつ、英語の運用に対する理解を深めてゆくことで、コミュニケーションを楽しむと同時に、考える力も育成することができたと言える。限られた回数の活動ではあったが、その中で、児童が英語運用のルールを発見し、それに従って自分の言いたいことを表現できるようになったことは、最終回の活動結果からも明らかである。最終回は、5年の場合は作品制作、6年の場合は発表であった。それらは学習指導要領の目標に加えて、英語運用につながる力を育てることができた結果であり、単なる暗記学習ではできなかったことだと考える。

平成23年度の英語完全実施に向けて、小学校での英語活動は本格的になってくると思われる。小学

校担任が中心になって活動が進められ、内容も検討・改善されてゆくであろう。今後も必要とされる場があれば、我々も協力してゆきたい。

(麻田暁枝 梅花女子大学短期大学部非常勤講師)

(河村有里子 GDM 英語教授法研究会会員)

(此枝洋子 梅花女子大学短期大学部教授)

(松川和子 梅花女子大学短期大学部非常勤講師)

注

¹「グループでの学習体制を活かしてほしい」と担任から授業中に申し出があった。その申し出に従い、グループで相談した後で「言う英語」がわかった児童には手を挙げてもらうようにした。場面を示して、少し待てば多くの児童の手が挙がるようになった。

²ビンゴゲームに用いる小さなワードカードのセット (here, there などの 12 個の単語×児童の人数分) は、松浦尚子さんが作成したものをお借りした。豊川小での実践と同時期に、河村・松浦で他の小学校の英語活動を実践していて、その際に使用したものだ。

参考文献

片桐ユズル+吉沢郁生 1999.『GDM 英語教授法の理論と実際』松柏社

此枝洋子 2009. 小学英語活動講師 1 年目 『News Bulletin』 61. 16-20.

此枝洋子 2009. 「英語ノート」の利用に関する提言 『梅花女子大学短期大学部研究紀要』
58. 27-33.

松浦克己 2008. 小学校英語と GDM 『News Bulletin』 60. 6-9.

松川和子 1999. 小学生と GDM—私立小学校での実践 『GDM 英語教授法の理論と実際』片桐ユズル+吉沢郁生 編 松柏社 178-182.

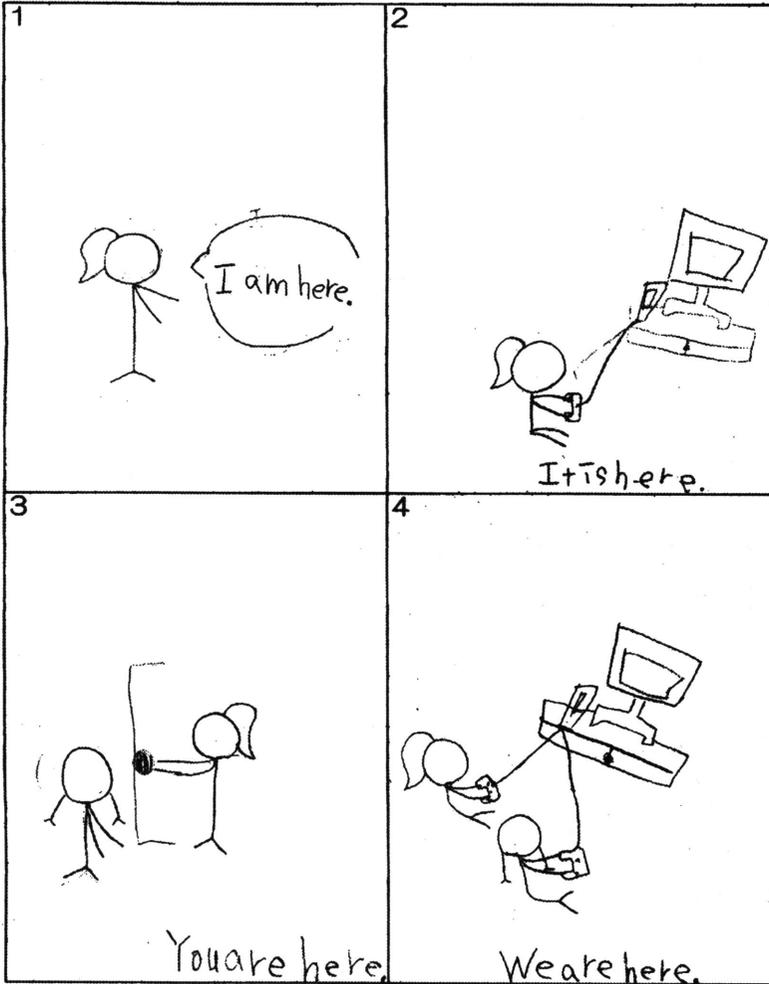
松川和子 2008. 「公立小学校の英語授業」見学記 『News Bulletin』 60. 9-18.

文部科学省 小学校学習指導要領解説の外国語活動編

Work

Name _____

■絵と英文で4コマのストーリーを作ろう



感想
4にままたかかをかたかかたにりするのほむかかしか、た
けと たのしか、たが

Good!

No.8

資料2 アンケート

あてはまるところに○を一つ付けてください。

1 英語活動は

- () とても楽しかった。() 楽しかった。() ふつう
() あまり楽しくなかった。

他に思ったことがあれば書いてください。

())

2 文章や語は

- () むずかしかった。() 少しむずかしかった。
() ふつう () かんたんだった。

3 わからない時どうしましたか。

- () 友だちに聞いた。
() 先生の言うことをよく聞くようにした。
() なにかヒントがないか 自分で考えようとした。

他に思ったことがあれば書いてください。

())

4 「わかった」ときの気持ちは？

- () うれしかった。
() 「やったあ！」と思った。
() もっとむずかしいことに ちょうせんしようと思う。
() 自信がついた。

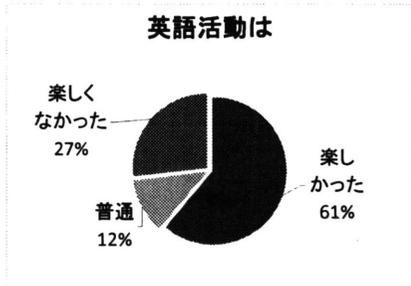
他に思ったことがあれば書いてください。

())

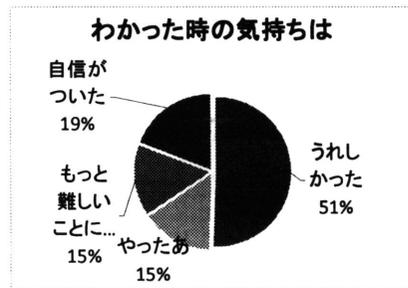
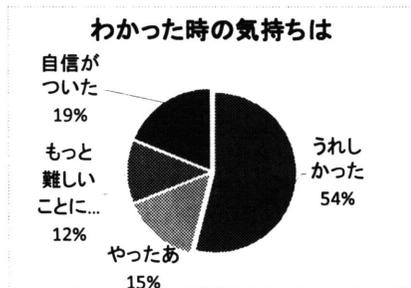
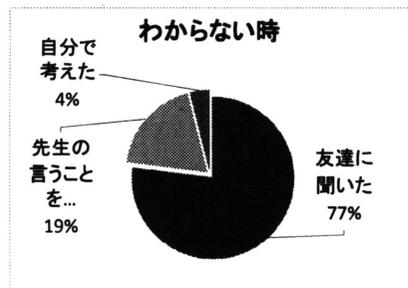
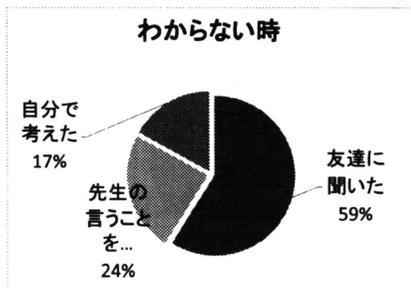
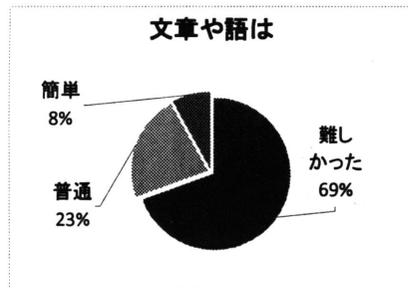
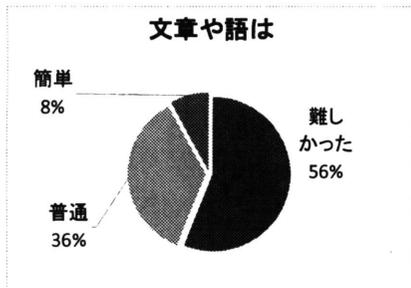
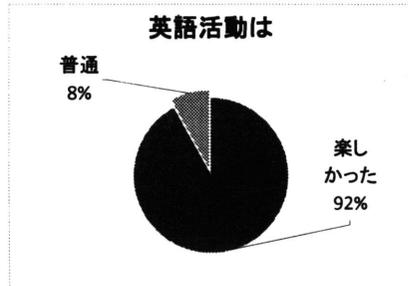
資料3 アンケート結果

豊川小学校5年生 英語活動アンケート結果

7月

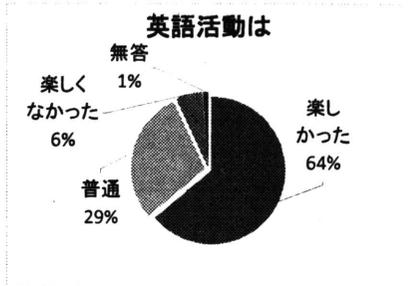


2月

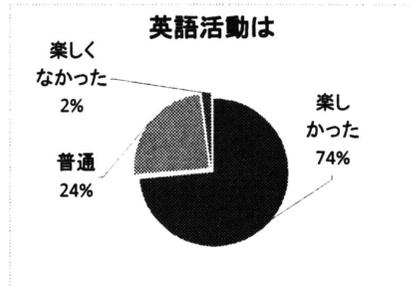


豊川小学校6年生 英語活動アンケート結果

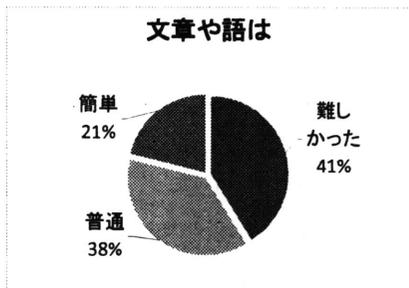
7月



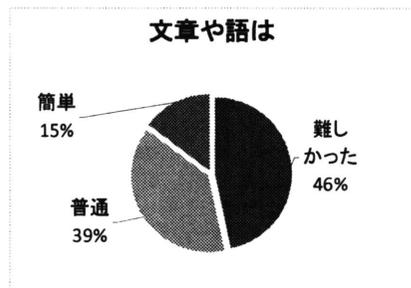
12月



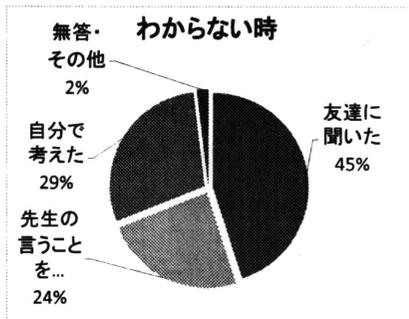
文章や語は



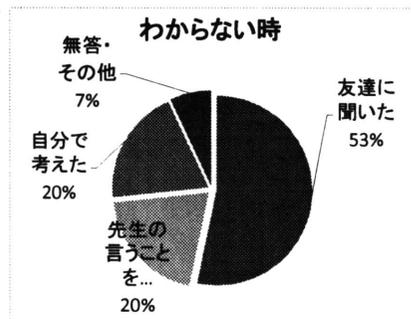
文章や語は



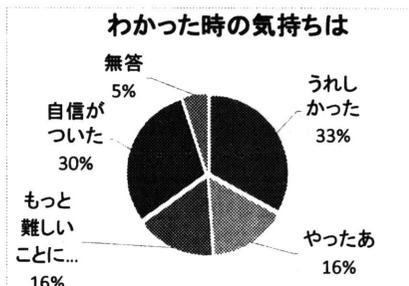
わからない時



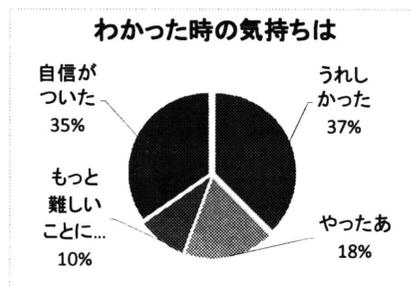
わからない時



わかった時の気持ちは



わかった時の気持ちは



英語で英語の授業？ そんなの、自分にできるのだろうか・・・

中山 滋 樹

次の学習指導要領関連で、高校英語の話題と言えば、「英語の授業は英語で」（注）という言葉がはいっていたことです。前後を読むと、全部英語だけと言っているわけではありませんでした。おもしろおかしく騒ぐ人たちにあまり振り回されない方がよさそうです。とはいえ、「英語で英語の授業なんか、できるはずがない！」と逆ギレ気味の見出しが見ついた記事や書籍も現れて・・・読んでみると、それほどエキセントリックな内容ではなかったりして、これもまた本の売り出し方のほうに疑問を感じるのですが・・・とにかく、注目を集めたことだけは間違いありません。

私自身は、今でこそGDMの会員でもあり英語で授業しますが、最初から自信があったわけではありません。それどころか、最初の年などは、「グチャグチャになったら、やめよう」「いざとなったら、日本語での授業に逃げ帰っちゃおう・・・」と心の中で思っていました。だいたい、中・高と、英語で授業を受けた経験など皆無だし、帰国子女でも留学経験者でもないのですから、一年間を英語で通す授業のイメージなど持ちようがありません。つまり、「想像さえできないものを、どうやってやれというんだあ！」という状態だったわけですが（実際には誰にも頼まれたわけではなく勝手に始めたのですが）、考えてみると、今、学習指導要領の言葉で怒ったり戸惑ったりしている人たちと、まったく同じだったといえます。思い出すほどに、いろいろなことが、ありました・・・

英語で授業をやろうと思ったのは、20年前、定時制高校へ転勤したときでした。それまでも、生徒たちの半分はアルファベットがあやふやで入学してくる学校でしたので、問題の根深さはわかっていたつもりです。でも、日本語で教えてもわからない生徒に英語で教えようと思ったわけですから、やっぱり、はたからは矛盾・暴挙にみえたでしょうか。

それでも、強行したわけです。若かったからかもしれませんが、それ以外のちゃんとした理由もありました。

- (1) 中学で教わったやり方と同じでは、生徒は嫌がる。(挫折感を思い出すだけ)
- (2) 学校に教科書を持ってくるという習慣・発想がない生徒に、教科書を前提の授業を考えても、しよせん無理。
- (3) 過半数はアルファベット26文字が書けない。だから、初歩からやっていい。
- (4) 多くの生徒にとっては、ここが最後の学校であり、英語の勉強になる。
だったら、人生最後の英語学習に、それなりの思い出をあげよう。

文部科学省の人たち、英語で英語の授業を始めた理由が「生徒の思い作り」という人もいるって、たぶん知らないだろうなあ・・・

さて、始めてしまったら、それはたいへんでした。なにしろ、今よりずっと世の中が乱暴で、現役暴走族もいるし、日によっては校門の前に対立グループが金属バットとか持って待ち構えてたりという時代です。それを、頭をモヒカンとかソリ込ミとかしている教室に入って行って、いきなり、英語だけ！もしかしたら、馬鹿？ ただひとつ、“生徒の想像を遙かに超えた異常な行為”だったことは確かなようです。

もちろん、最初のインパクトが薄れてくると、そう簡単に受け入れてくれるものではありませんでした。なにしろ、授業に参加しないことが過去何年ものあいだの習慣になっているのです。（これは、よい子だった人にはわかりにくいことですが、授業に参加すると、自分には理解できない・ついていけないことを直視することになります。その苦痛を避けるには、参加しないのが解決策です。つまり、劣等感から身を守る唯一の手段が、授業を聞かない・参加しない、なのです。）ひとりひとり、50cm以下までも正面から迫ってきて、しかも英語で何か言うまでは決して去っていかないといふとんでもない変なおじさんの登場に、彼らの心の内にも、そうとうの混乱や葛藤があったことでしょう。それは、悲劇？それとも喜劇か？

教室は、限界間際です。生徒がどんなにべちゃくちゃ騒いでいても、「自分には日本語禁止」と決めただけからは英語だけで押し通そう・・・って、それはたいへんでした。何が辛いといふって、それまで数年間、生徒を静ませるとか言うことを聞かせるとかの様々な技術を、日本語でならば、それなりに身につけていました。英語だけと決めたと同時に、それらを全部捨てなくてはならなくなったわけです。それは悲しいことでした。持っているものが多いほど捨てるのが辛いという、聖書の言葉を思い出したものです。

それでも、もうしばらくすると、「この人、どうしても、俺たちに英語しゃべらせたいわけ？」というのが、彼らにもなんだか面白くなってきたようでした。4月の冒頭で、「日本ノ学校デハ普通ヤラナイ英語授業ヲヤリマス」宣言をしたのが実際にどうということだったのかわかってきたらしいのですが、なにより、好奇心、だったのでしょうか。GDMの授業では、何が教室に現れるか、わからないものです。モヒカン君もヘビメタ君も、時々好奇心に勝てなかった、ということでしょうか。総じて、十代でない生徒には評判が良かったようです。昼間働いていたりやり直しで入ってきたりする人たちは意欲が高く、そうすると、参加の実感がある授業は喜んでくれていました。十代にはどうかというと、それは様々でしたが、一部では、六本木のディスコで（今なら“クラブ”）英語をしゃべってきたと喜々として報告してくることもありました。大学受験生なら英語の目的は入試ですが、彼らには、ナンパなのでした。それにしても、GDMで習った英語はナンパに使えると歓迎されるなんて、誰が予測し得たでしょう

か・・・

GDMは、文法的な事柄を一步一步順番に教えていくものですから、文法授業の進化形とも言えます。それと対極にありそうな「ナンバに使える English」と生徒が思ったのは、どうしてでしょうか。

ヒントは、昼の生徒たちが黒板に残した英作文でした。校名は内緒ですが、全日制はかなりの進学校であり、世間的には勉強のできる子どもの集まりのはずでした。それなのに、黒板の英作文は、いつもかなり悲惨。定時制の授業前にそれを消しながら、いろいろ考えていました。最大の問題は、語順がいけないということでした。とにかく日本語の語順なのです。ですから、何を言いたいのかがわからない単語羅列状態のまま崩壊して行って力尽きた、という英文でした。

一方、定時制の生徒は、とにかく最初に何を言うかが、合っているのです。ちゃんと英語の主語でしゃべり始めるのです。主語＋動詞、までは語順があっているから、その後がどんなに怪しくても、何について言いたいのかは相手にわかってもらえる英語になります。なるほど六本木で通じるのはこっちだなど思ったものです。ブローケン・イングリッシュの道も決して甘いものではなく、単語を並べただけではディスコ(今は“クラブ”)で通用しません。活用形よりも語彙力よりも、語順が正しいというのは根本的なところなのです。

訳読で勉強していると、日本語の文法、中でも日本語の語順から離れることが難しくなります。しかし、語順というもっとも重要な要素を学ぶためには、日本語の影響は避けたいものです。そうすると、できるだけ日本語を思い浮かべない状態で学習させたいし、それが有効な方法であるはずです。また、そうでなければ、お行儀の良い全日制の生徒より、家庭学習ゼロの定時制の生徒の英語が・・・なんていう事態は、あってはいけないのではないのでしょうか？

六本木は脇に置いておくとして、ある日ある生徒のことを最後に書くこととしましょう。1時間目の前(といっても午後の5時過ぎですが)、廊下でのことです。無精ひげの彼、いつもなら「うい～っす」と片手を挙げて横を通り過ぎるはずのところ、その日はなぜか、目の前に立ち止まりました。いきなりそばのゴミ箱を指さして、“That box ... which is blue is ... is ... is ... at the corner!”と言ったかと思うと、すぐさま全力ダッシュで逃げていったのです。食い逃げならぬ、英語の言い逃げ?よっぽど照れくさかったのでしょうか。これは、前の授業で関係代名詞の“which”をやったときのことでした。中学の時に挫折した者にとって、「関係ナントカ」はとても悔しい記憶の象徴であり、仇、亡霊、お化けの類らしいのです。ところが、それを、「俺、わかっちゃったかもしれない」と感じたら、今度はそれを試したくて我慢できなくなったようです。ちなみに、前日の授業では教室で箱を使っていなかったので、彼は暗記文を思い出したのではなく、完全にその場で英文を生み出したのでした。彼の心の内を想像すると今でも可笑しくなってきます。ただひたすらの好奇心、英語が面白かったんだと思います。

(東京都立武蔵丘高等学校)

注：「英語で英語の授業」と言われているのは、以下の部分です。

新学習指導要領 英語 第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い

2 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

・・・

- (2) 英語に関する学科の各科目については、その特質にかんがみ、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすること。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるよう十分配慮すること。

ゆっくりがいい高齢者クラスのための教材

石井 恵子

EP2 終了後の教材は？

高齢者のクラスは若い人のクラスと違って、とにかくゆっくりがいい。私も若い頃はどんどんテキストを進める方だったが、最近はずっと最終ページにたどり着いても生徒からは「もう一度やりたい。」途中から入った人もいるしそれならと再び I, You から始めてみると、困ったことだが、意外にも皆新鮮に感じるらしく「何度やってもおもしろいですね。」こういう傾向がいいのか悪いのか分からないが、とにかく生徒の高齢化が進んだ現状はそうなのだ。

過去のクラスの場合、Basic English 教材へ進んだり、EP2 対応の A Second Workbook of English (GDM Publications) に進んだり、EP3 に進んだり、一般英語の会話教材に移ったりと様々な方向へ進んだ。

A Second Workbook of English (GDM Publications)

これは 10 年以上前に一度使った。Brown 家の人々をめぐる古きよきアメリカの日常が描かれていていい教材なのだが、時代背景の興味づ

けが不十分だったせいかな、生徒は willing ではあったが forward-looking ではなかったもので、その後は使わなかった。ところが数年前、当時の生徒だった方に再会した時、その第一話、ブラウン家の兄弟の新聞配達の話に入る時に、私が前もって、ある映画でディカプリオが少年役で新聞配達をしているシーンを録画して見せたのがよかった、と話してくださった。私はすっかり忘れていたがそれなりに努力はしていたのだ。いつかまたやってもいいかなと思うが、もっと大きく見やすい活字にしてイラストを入れるなど、生徒が手にとってやる気になるような装丁になるといいと思う。

知的世界への窓としての EP3

EP3 はすばらしかった。準備は大変だったがそれに勝るおもしろさがあった。私はたった一度だけ、EP3 に挑戦したいという生徒に恵まれ、至福の数年間を過ごさせてもらった。修了する頃だったか西日本支部月例会で EP3 について話をするように言われ、その準備過程で Footnote に着目し、改めて EP3 の奥深さを認

識した。生徒はよくついてきてくれたが、息切れる人が出てきて、対策としてまとまった範囲を日本語に意識して「家で復習に使ってください」と手渡すなど工夫をした。今でも印象に残っているのは「太陽がなければ私たち生きていけないということが EP3 をやって本当によく分かった。」と言われた時のことだった。

使える動詞が少し増えたことで、厳密な Basic English の文章より扱いやすく感じられたように思う。逆に一度 EP3 を学習したクラスでまたベーシック教材に戻ることはしにくい。

ベーシックの本の扱い方

一方ベーシックの本へ進んだクラスでは、STEP BY STEP, PICTURE TALKS, 「沖繩民話」, 「耳なし芳一」, 「ベーシック先生のやさしい単語でいえる英語術」, 「500 語の英会話 II」その他をやった。Basic English は文章が長くなりがちで、さらに修辭的な文になると分詞構文や関係詞、挿入句などを見抜く力がないと難しい。また話しことばの会話教材が少ない。

これらの難点を補いつつ、この授業も基本的に EP と同じやり方で進める。ライブで新出語を教え、絵や写真でつなげながら生徒の発話を促し、最終的に長い文章とストーリーへもっていく。Writing, Listening の教材もできるだけ用意した。

「耳なし芳一」などは興味がないかと思いきや、案外詳しい筋は知らなくて毎回ドキドキするらしかった。「耳なし芳一」の音声テープは、しみじみと引き込まれるように語られていて、発音も聞き取りやすく生徒も私も何度も聞いた。

PICTURE TALKS は、絵の部分は目からうろこの宝庫。だが英語の部分はくどく難解なので簡潔な文に書き換えて使った。日本語で書かれている「500 語…」も含めて、あくまでも教室では日本語を使わない。

言えないことは言わない

少し内容がおもしろくなってくると、生徒にもいろいろ話したいことが膨らんでくる。膨らんでくるのはいいが、そう簡単には英語にならない。そのもどかしさは生徒のフラストレーションになった。「手持ちの語彙・語順力」と、「言いたいことを言うために必要な語彙・語順力」とのギャップが大きすぎるのだ。むずかしい教材を選んだ責任もあるが、言えないのに言わそうとした授業の運び方はよくなかった。

うまく言えない生徒の気持ちを汲んで代わって言ってあげることは悪いことではないが、むしろそのギャップに気付かせ、せつかくこれまでに習った語彙をもっと使いこなせるように指導するのが、この段階の生徒に対する教師の仕事だろう。それで私はよく口癖のように「言えないことは言わない。言えることだけを言う。」と言っている。実はとっさにベーシックで言い替えてあげられない自分が GDM 教師としてまだまだ、と思い知っての苦肉の策なのだが、しかし「自分に確信の持てることばだけを言い、あやふやなことばは使わない」というのはオグデンとリチャーズが掲げた真理でもあると思う。

EP3 の冒頭に記されている以下の教師心得は、「急がずゆっくり時間をかけ、考えさせる授業をせよ」と我々の痛いところを突いている。Too much too quickly - without examples or time enough to compare and to work out the relations of part with part - is the chief cause of broken English.

若くない人は留年するのがいい

以前 30 歳以下限定の若い人のクラスを教えたことがあった。その人たちは GDM でとても元気になって、EP2 修了時にはもう自分達は何でも言えて何も怖くないと会社を辞めて留学した人が何人か出た。私はその後そういう若い人

を教えるチャンスに恵まれず、若くない人たち（いつのまにか我もその一人）とのお付き合いがずっと続いている。最近、理解度の低いクラスの場合、できるだけ EP 卒業を延期し留年してもらって EP をさらに深く極める方向にウエイトをおくようになった。EP は繰り返しに耐えうる実によくできたテキストだ。

EP のワークブック

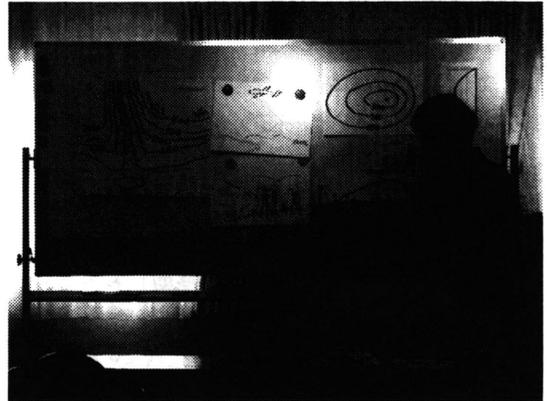
既習事項を定着させるための卒業引き延ばし作戦の一つとして使えるのが、EP の後に載っているワークである。1970 年ぐらいまでは“A First Workbook of English”1959, Washington Square Press 同じく“A Second Workbook of English”1965 の 2 冊の本であったが、その後現在の EP1 と EP2 の本文の後に収まるようになった。

ワークの内容は、基本的に本文の進度に添ったものではあるが、たまに対応するページではまだ習っていない文法事項が無頓着に出て来る。当時ワークブックを編集する際あちらこちらのワーク教材から寄せ集めたのかもしれない。しかしそのことはさほど私の中では壁になってはいない。難しい構文はさらりとやり過ごすようにし、あまりに難解なものはやらない。一見易し過ぎるような箇所はディクテーションに使えるので、それようにネイティブによるワークだけの音声テープも用意した。

ワークがストーリーの場合はこんな風に進めていく。まずもしこれが EP の 4 コマの絵のように描かれるとしたらどんな風になるだろうと想像して、できるだけ生徒の発話の助けになるような一連の絵をシンプルに描いてみる。

等高線と地図が出てくるストーリーでは、長い文章をどうやったら言わせることができるか考えていて、地図を立体模型にして見せることを思いついた。2010 年春の京都セミナーでは、

生徒が手をつないで 3 つの違う高さの輪になって人間立体模型を作ることを思いついた。



家族が夜行バスに乗るストーリーでは、教室の机を駅のカウンターに見立てて切符を買う状況を再現したり、椅子を並べてバスの座席に見立て実際に座ってもらい毛布を掛けたりする動作をしながら、だんだん英語を導入していく。

こういうことを数回に分けて少しずつ繰り返しながら先へ進めていくうち、同じ英語を何度も繰り返すわけだから繰り返すたびに前よりもうまく言えるようになり、繰り返すことが心地よくなっていき、そのうち皆がその物語の中に入り込んでいく感じになる。ちなみにアフリカでも遠野でも、語り部の使うことばは具体的でシンプルで数も少なく繰り返しが多く、しかも聞く人の耳に心地よく響くという。

オリジナル教材・リメイク教材

できあいの教材に頼らず自分で教材を作れば、まさしくそれは自分の生徒のレベルに合わせた理想的な教材となる。EP の途中で時々内容にこじつけてちょっと横道にそれ、コロンプスの話、ギリシャ神話、中国の昔話、白雪姫、織り姫や北斗七星など天体にまつわる世界の昔話、1 ドル紙幣誕生の話、パラリンピック選手の秘

話など、その時の生徒の興味と学習レベルに合うように簡単な教材を作っては授業をし、また EP 本文に戻る。中には内容に興味を持ちネットで調べて翌週資料をもってきてくれる生徒もいて、英語学習が楽しそうだ。

しかし勿論もしネイティブが書いたきちんとした Basic English の短いストーリーがあるならそれを使うにこしたことはない。例えば数年前 Basic English Workshop で唐木田照代さんが紹介されたフィリピンの昔話は、こなれた Basic English が土台なので、多少の語彙調整だけで安心して使えた。生徒は昔話特有の展開がおもしろかったらしく、中でもフィリピン版「姨捨山」は、自分たちが高齢なので身につまされて展開にハラハラしたそうだ。劇的展開だったので、脚本化して、読み合わせや立ち稽古をし、最後はちょっと劇のまね事をして楽しんだ。

English through Television の効用

私の EP 足踏み作戦のもう一つは、English through Television である。この教材をいながらにして簡単に使えるようになったのは発見者

とユズルさん達の尽力による。音声と映像を巧みに駆使して制作されているので、ライブと文字の間あたりを普段とは違う感覚器官で学べる。前もってライブで必要な表現をやっておき、見た後には手作りワークシートでチェック。最終的に生徒がストーリーを再現できるように丁寧に指導する。土台がきちんとできているから、私にとってはお助け教材である。

高齢者クラスの存在意義

これからの社会を担う未来あるこども・中学生・高校生・若者を教えている教師と違って、私のように 60~70 代が中心の年齢のいった方達を教えていると、時々一体この方達は何のために習っているのか、私は何のために教えているのか、と考えることがある。週 1 回ジムや健康教室に通うのに似て、からだと頭をつなぐ脳トレ教室だと考えればいいのか。毎回どうやったらあの方達に分かる授業、来週もまた来たいと思ってもらえる授業ができるか、考え続けている私の方が、その恩恵に浴しているのかもしれない。

(GDM 英語教授法研究会会員)

入門期以降の英語と Basic English

後藤 寛

まえがき

本稿は拙稿(2009a)で論じた趣旨の延長線上に位置づけられる内容のものとする。すなわち前回の稿では「入門期の英語と Basic English」と題し特に音感の獲得という視点か

ら論じた。今回は「入門期」ではなく表題に示す「入門期以降」という観点からさらに論旨を展開する。英語も入門期が最も重要なのであるが実際問題として入門期ばかりを論じてもおれないのである。およそどの外国語習得も入門

期のレベルだけではその言語を習得したことに
はもちろんならない。外国語学習は入門期のご
く最初にはだれにとっても新鮮さもあり、ある
意味ではぼどのような教授法によれどもそれな
りに受け入れられましょう。問題は事実上この
入門期というより用いられる語彙数も一気に増
えだし、新鮮さと感心の度合いの薄くなる入門
期以降であろう。脳神経科学の領域にも立ち入
る英語のディレクトメソッド(Direct Method)
なるものの教授者はネイティブスピーカーか、
もしくはそれと同程度の音感と語感をもつ本物
の確かな英語力が必要と筆者は考える。その点
ではハーヴァード大学の I.A.Richards ら英語
民族の言語脳をもつ生粋のネイティブにより実
践された入門期用の GDM(Graded Direct
Method)も彼らにはできたにしてもそれを真似
ることは日本人には大変難しい。Basic English
が真に正しく使えるオルトロジー(Orthology)
もそもその前提となる。拙稿(2009a,c)で注目
したフランスの音声心理学者で耳鼻咽喉科医で
あった A.Tomatis は「耳は脳のとび出したもの」
と言ったがディレクトメソッドといえども、日
本語音に特有な周波数のみを処理する聴覚(脳)
神経がすでに完全に固定し論理思考をする年齢
に達した学習者に限られた言語環境のもとで行
うわけでありもちろん限界がある。外国語教授
法としての GDM は 17 世紀のチェコの
J.A.Comenius による直観主義(Intuitionism)
の教育理論を背景に出てきたものでもあるが、
これは論理主義(Logicism)とは思想的に対極を
なすものである。言語哲学的にはそもそも

C.K.Ogden の *Basic English* 理論が大変難しい
のであり、ましてその体系的実践(個々の単発
的な導入実践はやや別としても)が容易なはず
はなかろう。the Graded Direct Method of
teaching English to the Japanese のように to
the Japanese か、それとも他の to the x かでも
事情は同じではなかろうが、構造主義言語学
(Structural linguistics)の華やかな時代の一連
のディレクトメソッドの方法も特に日本の特殊
事情のなかで入門期よりもむしろそれ以降の関
わりをどのようにとらえ、どのようにとりもっ
ていくのかのほうがより現実的な問題であるよ
うに思える。

一、伝統的英語教授法の利点を生かす

入門期は音感の獲得に照準することである
点は拙稿(2009a,c)ですでに論じたとおりであ
るが、入門期以降で直接的に問題となるのは
GDM で用いられる Controlled English でもな
く、またいわゆる語彙制限の Basic English そ
のものでもなく一般に広く用いられる英語
(Uncontrolled English)である。ただし Basic
English は英語という言語を本質的にとらえる
ための一種のメタ言語、あるいはさらに高次の
メタメタ言語としても有効であり特に入門期以
降に隠しもついわば秘密兵器となる。ここで入
門期を終えた日本の高等学校で用いられている
文部科学省検定済み英語教科書のうちの
Writing 用教科書〔Powwow English Writing
(2008), 文英堂〕からの一節を素材に今日一般
に行われている伝統的教授法に基づいた評価法

(Evaluation)とも絡むテスト問題の作成例を1つ独自に想定し提示してみることにする(もちろん *Basic English* 文ではない)。

Fukuhara Ai is one of the best table tennis players in Japan. There are two reasons why she is a good table tennis player. One reason is () she has a **strong** will. She began playing table tennis at the age of three. Since then, she has practiced eight hours a day. The other reason is () her skill is excellent. ①【addition / her / in / powerful / shots / to】, she learned the **high** toss serve. Thanks to those skills, ②【able / in / part / she / take / to / was】the 2004 Athens Olympic Games.

[設問]

1. 文中の2つの空所に一般に用いられる 共通な1語を入れよ。
2. 文中①, ②の【 】の中の語を意味の通るように整序せよ。
3. 文中の2つの下線の語句 Since then と Thanks to を他の表現を用いて言うとして次の空所にそれぞれ1語を入れよ。
 - ・ Since then = () that time on
 - ・ Thanks to = () ()
4. 文中の2つの破線の語 **strong** と **high** の名詞形をそれぞれ書け。
 - ・ strong: ・ high:
5. 文中にある語 **learned** と Athens の発音をそれぞれ音声記号で示せ。

きわめて平易なテスト問題例を想定してみた。この英文そのものはいわゆるパラグラフ・ライティングの例文として上記検定本に掲載されている文例であるが、ここではその英文の中身を改めて角度を変えてテスト問題形式の例としてみた。設問1は空所補充であるが手短に習熟度の一端をみる伝統的、実用的な方法でパラグラフの理解度を測定するいわゆる有名な Cloze test として知られる空所補充によるテスト法の範疇に入る。ここでは **that** がもちろん正解であるが、こういう思考上の要(かなめ)となる **that** の用い方は重宝である。ただし、ややくだけた語りではネイティブはしばしば **because** とも言うことも教室でコメントされてよい。また、こういう場合の **that** の前の **is** にはやや強勢を置き **One reason IS that...**, **The other reason IS that...** のように発音しないとおかしい点は重要でそれも是非コメントされる必要がある。ついながらこの接続詞の **that** に関連し GDM で導入されている関係詞の **which** などは実は N.Chomsky 風の変形文法(Transformational grammar)の考え方そのものである。次の設問2は語句整序法(広義の文整序法)で①が **In addition to her powerful shots**, ②が **she was able to take part in** となるがこの種の文整序の形で語句の結合・配列を問題とするのはきわめて重要で英語力を推し量る手早い手段ともなる。拙著(2009b)では文整序法をこういう考え方のもと集中的に取り扱った。設問3の解答はそれぞれ **From**, **Because of** で、こういうところで教授者は *Basic English* をさらりと利用すること

ができる。設問4は高校生など派生語に弱いはずでありそこに注目する例である。strongの名詞形 strength, また high からいわゆる名詞形の height のような基本的な派生語をその都度確認させることは学習者の語彙力を試したり、その増強のためのこれまた手早い手法となる。heightのような-eiが/ai/の音となる例は英語における不安定なスペリングと音との関係であるフォニックス(Phonics)に意識的にさせることになり、英語は発音をおろそかにすることがいかに危険で要領の悪い学習法かに気づかせることにもなる。このあたりは入門期、入門期以降を問わず最も重要な点である。最後の設問5の発音記号表記は重要なものと筆者は考えている。これが高等学校で実践されていないのは盲点である。伝統的英語教授法が日本の諸般の事情からすれば最も穏当なのであるが、この発音記号表記が重要視されないのは片手落ちである。ここではそれぞれ [la(r):nd], [æθ(ə)nz] (他の表記法もあるが)と表記すればよいが、発音記号が大学生でも満足に書けないのである。表記法はもちろん IPA(International phonetic alphabet)方式でよいのであり高等学校までに指導されねばならない。世界の主要国名、主要都市名などさえ英語で正しく言えないのであれば世界について何も語れない。かつて早稲田大学教授で芝居風・舞台調の見事な英語を披露し学者テレビタレントとしても一世を風靡した五十嵐新次郎氏は「発音はその発音記号を書いてみるのが重要です」と説いていたことを改めて想起しますが、正確な音感イメージがなく単

に口を開けば英語になると思っている泥縄式の学習者があまりにも多いのである。

そこでどうであろうか？上例のような平易なパラグラフを英文でスラスラ綴ることができれば入門期を終えた学習者として大変立派なのであるが、現実には容易でもなく背景に多くの英語の知識を必要とする。上記、想定設問の例は伝統的ではあるがいずれもそういう知識を呼び起こす手段となろう。さらによりハイレベルの設問を想定すれば、たとえば文中の語句 at the age of three の5語を3語で表現するとしたらどの語を消去するか？など簡素化する語数削減の表現手法を問う設問も考えられる。正解は at age 3 (three)である。the と of を省略し簡潔に言う表現法であるが at は消去できない。空間詞 at はここでの意味的比重のある語としての働きがある。この部分を *Basic English* で言うとすればもちろん age は用いず when she was three years old となるが、これも教室で一言コメントされてよい。ただし *Basic English* というコトバは実際はあまり用いないほうがよかろう。学習者側がかえって混乱するからである。さらには誤文訂正の設問もハイレベルとなるが大変実用的である。たとえば文末の the 2004 Athens Olympic Games の the と Games の s を抜いておいて補充訂正させる設問も考えられる。いわゆる定冠詞・不定冠詞や単複の数の感覚を養い敏感にさせるために役立つ設問となる。誤文の箇所が見抜け、しかもこう訂正するのがよいなどと言える英語力はその極致であろう。

いずれにせよ英語全体の知識と力は日本人教授者による安易な会話中心の方法ではなかなか身につかないはずであり伝統的な教授法で母国語の日本語を介し徹底するよう配慮しつつポイントをいくつも押さえるようにするほうが要領もよく、まずは手早いし現実的である。学習者も、理解できない点を言えない英語でしか質問ができない状態ではまずいのである。上記のきわめて基本的で平易な設問例にも答えられない高校生も多かろう。全国には多くの高等学校があるのであり進学校としての高等学校ばかりではない。入門期以降で検定本の内容も消化できない高校生は全国的に多いはずである。文字にしても活字体は読めても筆記体は読めない、書けない例も今日多かろう。入門期より入門期以降で意欲、関心の度合いが低くなりモチベーションをもたない学習者を対象に、生活指導と雑務に追われるなかで英語を教えることで悩んでいる中学校・高等学校の中等教育機関の英語教師はきわめて多いはずである。どちらかといえば女性向きに思えるがGDMという初歩的教授法が救世主のように一瞬映り教師が飛びつくのはその悩みを象徴するようにも思える。ただこれも一筋縄ではいかず先には壁もあろう。一方で専門分野の理論追究に関心のある高等教育機関の大学の研究者は教授法で悩んでいることは少ないのが実情と言えよう。日ごろの研究成果の一端を学生に還元するため教壇にも立つが主には研究室での研究だからである。直観主義教育のGDMも学会での研究発表を経て多くの研究者の手に渡り応用言語科学的に深く理論

化され彼らの研究業績上の学術論文とならない限りは浸透しないが、現実に彼らによる体系的実践としてのGDMはイメージしにくい。躊躇されるであろう。TeachingよりLearningのほうに関心のある研究者の端くれである筆者自身の例でいえば、いわゆる純粹理論研究のほうに悩みは多いが教授法の面で特に悩んだことはない。理論研究で悩むといえども一方でその追究に憧れの念とロマンを感じているのであるから悩みの質もまた別なのかもしれない。

目下、日本人が「日本語を用いず英語を教える」ことが最高の教授法であるかのように叫ばれているが、たとえば入門期のGDM英語(=the step-by-step and English-through-English way of teaching based on C.K.Ogden's theory of language, and the mind)では日本語は用いないといえども一方でいわゆる英語が話されているともやはり思えない。段落(パラグラフ)的流れのある柔軟性をもつ英語ではなく文单位的で、枠付けされ、きわめてコントロールされた英語(controlled English)で思考上の自由がきくよう一方で抑圧(mind control)状態にもする。絵や現物があらかじめ視覚的にとらえられているなか情報提供上での新情報(NI:New information)か旧情報(GI:Given information)かでも音(Sound)・イントネーション(Intonation)の問題が大きく関わる。DMと銘打った限り明らかに誤りや不自然な怪しい英語使用の許されない完璧さが求められ、ここが難しい。理論は大変優れている。GDMにおけるDM実践はネイティブ並みの確かな英語力が要求さ

れるばかりか G(Graded)の中身も問題となる。そもそも G の中身の何が「易」で何が「難」か、そしてそれはなぜかの問題が理論的に検証されてよからう。

今日、大学では英語そのもの以外の履修科目で日本人教授者の講義言語が英語であることがそれほど珍しくもないが、これは英語圏での留学で博士の学位を取得し現地生活体験のある特に若手の研究者が増えどの大学にも多数いるからでもある。たとえば「世界の言語と文化」、「文学としての聖書」などという諸々の文化・社会現象テーマのもと英語(Uncontrolled English)によるいわゆる「講義」であり、もちろん話の内容からもっぱら情報吸収に意識が傾く。教養英語科目として「気候変動と地球環境」などのテーマも面白い。長年、筆者もそういう使用言語が英語の講義科目を同僚のだれよりも多くもってきた。しかしこの種の文化・社会面とは別に英語そのものをじっくり教えるとなるとあまり無理をするのではなく、やはり日本人による日本人対象の英語というわけで互いの母国語である日本語を介しそれを巧く生かす最も無難な方法を軸に *Basic English* の適宜導入も含めて考えるのが穏当であるように思える。そもそも日本の中学校・高等学校の公的中等教育機関では教師は諸々の学校業務のかたわら教科目を文科省検定本ののっとり担当するわけで、英語科目も日本語を用いることはいわば前提条件で任用されているとも言えよう。日本語が満足に使えないネイティブ英語教師とは違うのである。高梨(1985)が明治以降今日までの長い日本英学

史上で優れた英語教師(先の五十嵐新次郎氏を含め)の採った教授法を専門家の立場から説き、日本語を介する伝統的な教授法のもつ意義、利点とともに日本の学校の諸事情からはそれが最も無難で適すると最終的に結論づけたが注目してよい。日英語間の相互変換の問題に常に直面しているプロの通訳者、英文記者、海外特派員などの多くも日本語を用いる学校英語の教育的意義をそれなりに認めている。かつて見事な英語の話し手で駐日米大使館の通訳官でバイリンガルの西山千氏も同じ見解であったように思うし、およそ彼らは基本的にみな同じ考えの持ち主であろう。文字言語としてのみでなく音声言語としての英語という意識のもと、音声を介した英・日の相互変換(トランスレーション)方式や、英文を見て即座にその意味的流れを予測し次々と淀みなく日本語に口頭で順送り式・同時通訳式に変換するサイトトランスレーション(Sight translation)〔サイトラ・視訳〕など通訳者養成機関などで易から難へ段階式に行われる訓練法は英語力も手早く身につけられよう。

入門期以降の中等教育としての高等学校用文科省検定本はよく考案され編纂されている。音声面に比重をかけこれを上手に生かせばよからう。上記の例でも見たが *Un-Basic English* を部分的にでも適宜 *Basic English* で言い換えることで表現法のバラエティーを考える手法もある。特に上記検定本は大変よくできている。表題 *Powwow English Writing* 中の *powwow* という語も面白い。会話英語ばかりではなくいわゆる受験英語にも優れ英語全体の知識があり、

また他の科目でも総合的学力のある学生のほうがやはり大学入学後の英語による講義科目でも明らかに理解力に優れるのである。これは歴史とした事実である。さらに本格的な習得はその後の英語圏での留学や生活を通じての「文化」の吸収ということになるが、たとえば日本文化の一縮図でもある大相撲の世界（角界）で日常生活を日本で原体験する外国人力士の日本語習得法は外国語習得に関して多くの示唆を与える。

本節ではライティング用の文部科学省検定本（高等学校用）に提示されているパラグラフ・ライティングの平易な一例文を軸に入門期以降の取り扱い方について触れたが、短いほんの1つのパラグラフからも発展的に重要ないくつかの注目点が見い出される。伝統的教授法も要は教授者自身の扱い方しだいであると同時に学習者側の意欲・感心の度合いの問題ということになろう。

二、述語論理(Predicative logic)からみる

Basic English の構造

本節では視点を移し入門期以降の英語を考慮の上で背景にすえ置く *Basic English* を強く意識するなかで説くこととする。ここでは「述語論理」に注目したい。文の主部と述部の2区分はそもそもは古代ギリシャのアリストテレスをはじめとする2値的な古典論理学にその原点があるが、19世紀から20世紀にかけてドイツの哲学者で数学者であった G.Frege がそれまでの古典論理学・命題論理学の流れを変える新しい論理学として築き上げたのが述語論理学

(Predicative logic)である。これがその後、英国のやはり哲学・数学者であった B.Russell などへと受け継がれ記号論理学(Symbolic logic)が進展し今日的なコンピューターサイエンスの背景にもこの記号論理学や広義の意味学(Semantics)があることとなった。その点では G.Frege が記号論理学の先駆者ということになるし、そもそもいわゆる「意味の三角形」の考え方も彼が C.K.Ogden と I.A.Richards に先駆けて提示したが、もちろん G.Frege とほぼ同時代に生きたスイスの構造主義言語学(Structural linguistics)の元祖 F.de Saussure も記号論理学の分野に貢献したし、もっと古くは17~18世紀のドイツの数学者で微積分法を発見した1人であった W.Leibnitz も記号論理学の分野の貢献者であった。これら著名な学者の業績を一々取り上げていく余裕はないしそれが趣旨でもない。ここでは述語論理学を築いた G.Frege やその後の B.Russell らが注目した述語を関数と見る1点にしぼり、さらにこれをつい最近のイ・サンド(2008, 2009)が提唱した英語文を2進法から分析する考え方と結びつけてみることにしたい。2進法の歴史は古く W.Leibnitz がその先駆者であったようである。

G.Frege にはじまる述語論理学は陳述文 y を関数方程式 $y = F(x)$ [x : 項(Argument)] で示す画期的なものであり述語を関数(Function)としたが、英語文を N (Nominal)と P (Predicate)に区分し数的には0と1にすべて変換できるものとしたイ・サンド(Lee Sang do)の2進法(Binary digital system)による分析法とこれを

絡めることで *Basic English* の統語法(Syntax) を見てみることにしたいのである。イ・サンドの2進法英語に関してはすでに拙稿(2009c)でそれなりに取り扱いましたがNとPの見方は斬新で注目に値するので改めて考えてみたいと同時にその検証を試みたいのである。G.Frege の述語論理学では文の主辞・主語(Subject)となりうるのは無冠詞の固有名詞(Proper noun)のみ (proper「本来の、正式の」と考えたが、拡張して一般にそもそも名詞Nはいわゆる意味はもたず「言及されるもの」としての指示対象(Referent)のみを提示するのであり意味(意義)はすべて述語Pによって決定されるとみただけで、これが関数ということである〔このあたりの見方は英語だけからではなくラテン語系言語のたとえばスペイン語などに支配的な論理的に命題が肯定か否定か、真か偽か、また陳述が客観的事実か主観的仮定かなどの問題とも絡む接続法、すなわち叙想法(西: Subjuntivo, 英: Subjunctive)など動詞Vの叙法(Mood)との関連から見ると理解しやすいことは付け加えておきたい)。

ここで述語論理学での述語論理と2進法との絡みから *Basic English* の統語法・文整序法を見てみることにする。上記イ・サンド(2008)は英語の基本型をNとPのみで7つ提示し2進法からみる考え方を提案したのである。それを次に列挙してみる(便宜上それぞれ下付け数字は筆者による)。

- ① N - P ② N₁ - P - N₂ ③ N - P₁ - P₂
 ④ N₁ - P - N₂ - N₃ ⑤ N₁ - P₁ - N₂ - P₂ ⑥

- N₁ - P₁ - P₂ - N₂ ⑦ N - P₁ - P₂ - P₃

この①~⑦を数字に変換するとすればやはりイ・サンド(同)がそうしたようにNを0, Pを1と考えればよからう。彼はNが0でPが1であるとした根拠は具体的には示していないので筆者なりに解釈すると述語論理学では上記のようにNにはいわゆる意味はなく指示対象を示すのみであるとする点と、述語論理学での命題の真理値はそれが真であれば関数方程式 $y = F(x)$ における y は1であり ($y = 1$), 偽であれば0である ($y = 0$) という考え方を背景にするとみればよからう。すると上の①~⑦はそれぞれ順に(01), (010), (011), (0100), (0101), (0110), (0111)となる。これが7つの基本文型となるがイ・サンド(2009)は新たに8つをその補足的文型として付け加えた。したがって合計15種類になる。ただし、付け加えた8つはいずれも英語文に現れる例はまれで1%未満だと彼は記しているがそれも含めて検証したい。これら8つを記号表記のみで提示すると⑧NPNNN, ⑨NPNNP, ⑩NPNNP, ⑪NPNNP, ⑫NPNNP, ⑬NPNNP, ⑭NPNNP, ⑮NPNNP となるが、0, 1の数表記で順にこれらを列挙しておけば(01000), (01001), (01010), (01011), (01100), (01101), (01110), (01111)となる。そこで次に2進法分析による具体例を提示することで基本英語文(ここでは *Basic English* 文)の述語論理を見てみることにするが、やはりそれにはC.K.OgdenがBASIC ENGLISH WORD LISTにEXAMPLES OF WORD ORDERとして掲げたよく知られる2つの基本文を引き合いに出

すなかで扱うのが理にかなっていると考えるのでまずそれを次の 1a), 2) として提示する。分析法そのもので筆者はイ・サンドと大枠は同じではあるが必ずしも一致しないが面もある。筆者なりの分析法によると同時に簡素化を考慮してここでは各項の後ろに N, P を括弧づけて表示することとする (いわゆる接続詞は下線で示す)。

1a) We (N) will give (P) simple rules (N) to you (N) now (P).

2) The camera man who (N) made an attempt (P) to take (P) a moving picture of the society women (N) before they (N) got (P) their hats (N) off (P) did not get off (P) the ship (N) till he (N) was questioned (P) by the police (N). (注, police は国際語彙)

1a) で注目すべきは不変化詞(Particle)としての空間詞を伴う to you の 2 語を N とみることであり, また now のような副詞を述語としての P とみなすことである。to you がなぜ N かは now を P とする考え方とも関わる。すなわち now には<it is now>のような述語論理があるとするわけで, このあたりはそもそも古典論理学以来の伝統をふまえた命題の主題と陳述を A = B でとりもつ考え方を基底にしていると考えてよい。その点では to you にはそのような述語論理は認められないわけである。この to you を N とする考え方は to の顕現しない次の 1b) とやはり関わっているとみるとよい。

1b) We (N) will give(P) you (N) simple rules

(N) now (P).

1a), 1b) を記号表記のみで提示すればどちらも NPNNP であり上記①~⑮の分類上は⑨となる。数的には(01001)と表記できる〔このあたりに関しては次の 3) の例でも触れる〕。2) は①~⑦の複合型となる。これを筆者なりの方法で表記すると NPPN~NPNP(N)PN~NPN となる〔記号の~は接続詞などの挿入を示し, 括弧付きの(N)はダミーとして置くことを示す〕が, これは⑥・⑤・②・②の複合型であることがわかる。数的には(0110), (0101), ((0)10), (010)で示される。同時にこの文全体は述語論理的に淘汰され⑥・⑤が N となり, ②・②が P となる NP, すなわち①となり数的には(01)とみることができる。全体を改めて数に還元すれば 2) の文は(01100101(0)10010)となる。ここでの注目点は to take を P とみなすことである。これは述語論理的には<the camera man made an attempt>と繫辞(Copula)の<BE>を介した<he was to take>との合成と考えられる。また before 以下で they got their hats off の off が P である一方で did not get off the ship では get off の 2 語が P となるが, やはり前者は述語論理的に<BE>の<their hats were off>であるのに対し後者の off は get とは遊離しない。get などいわゆる動詞 V の意味はこの例での off 「離れること」のように空間詞(Spatial particle)により最終決定されるのであり get そのものに始めから意味があるのではないのである。英語の場合多くの V はそれと共起する空間詞(SP)によって意味が決定されるということでこの点は最

も重要である。別な言い方をすれば文中で V の意味が不明でも固定し不動の SP の意味からその本質の意味が必ず推測され定まるといふことである（このあたりはラテン語系言語などとは事情が異なる）。さらに文末の *by the police* 全体が N となるが、これはいわゆる能動態と受動態の本質的關係からすれば納得されよう。さらに次の例を見てみるが *An Outline History of the United States* (by J.B.Wight) からの一節である。

3) Columbus (N) had made (P) a great discovery (N), but it (N) is clear (P) now (P) that he (N) was not the first white man (N) to come (P) to America (N). Almost 500 years before (P), seamen (N) from the north of Europe (P) had made (P) their way (N) across the Atlantic Ocean (N) and back again (P). It is because nothing (N) came (P) of their journey (P) that Columbus (N) has got (P) almost all the credit (N) for the discovery of America (P). At first, however, he (N) was not conscious (P) that this (N) was a new land (P); in his opinion (P) he (N) had got (P) to India (N). That (N) is why (P) he (N) gave (P) the name "Indians" (N) to the men (N) living (P) there (P).

この文中の...to come to America の to come が P であるのはやはり述語論理的に<BE>の<he was to come>との合成であるし、また to

America を N とするのは背景に<BE>を介する述語論理関係ではない理由による。さらに文中の下のほうに to India, to the men があるがこれらも同類である〔こういう例は上の 2) でも見た〕。また文中の Almost 500 years before をここでは P と考えたい。それはこの文全体を It was almost 500 years before that... という <it...that>の形式による論理構成として見ることができるからである。接続詞や一部の副詞を広義の素詞(Prime)とし文中で特別の存在にあるものと仮説的に位置づけ筆者なりにここではすべて文中で下線により示すこととした〔上の 2) の例も同様〕。また文中 from the north of Europe が P であるとするのはこれまたやはり <seamen had come...> と <BE> により <seamen were from north of Europe>が合成されたとみなすことが根拠である。さらに下の in his opinion という副詞句をここでは P としたのは<it was his opinion that>という論理形式を想定してのことである。最後の文中の he gave the name "Indians" to the men living there は上の 1a), 1b) で見たのと同じパターンを含んでいるが、これは NPNNPP となり上記イ・サンドの提示した①～⑦の項数が 4 つまでの構造型と項数が 5 つの⑧～⑮の構造型のどれにも属さない⑯もあることになる。したがって、この種の 6 項をもつ型もあるわけで英文には派生的に①～⑮以外の型もいくつかないわけではないことは指摘しておきたい（ただし N,P=(0,1)の 2 進法には還元できよう）。この文は he gave the men living there the name

“Indians” とすることもこの場合は可能ではあるが情報提供上での意味ニュアンスは異なるわけで、こういう場合の to-与格構文は to 以下が新情報でありその部分の意味がやや強くなる。2進法英語では対格構文も to-与格構文も同じ NPNN すなわち(0100)と分析できるが、伝統的な名称としての間接目的語 O₁ と直接目的語 O₂ の配列法に関しては注意を要する例もあるので以前に日本ベーシック・イングリッシュ協会研究紀要、同協会の *Basic English News*, また *GDM News Bulletin* で取り扱ったことがある。たとえば、次の 4a), 4b) では後者は非文となる。

4a) John gave me a cold. (ジョンは私に風邪をうつした)

b) *John gave a cold to me. (*非文)

こういう場合の意味解釈上のキー概念は被影響性(Affectedness)であり、ここでは間接目的語 O₁ の me が被影響目的格(Affected object case)となり対格構文しか許さず to-与格構文は非文なのである。

そこで上の 3)での living と there であるが、ともに P とするのはそれぞれ繫辞<BE>の<the men were living>, <the men were there>と考えるわけである。このパラグラフ中の文はそれぞれ記号表記 NPN~NPP~NPPN,(N)P~NPPNP~(N)P,~~NPP~NPNP,~~NPN,(N)P~NPN, NP~NPNNPP となり、接続詞などの挿入の記号~を用いることによる筆者なりの分析では1つを除いてイ・サンドの提案した 15 種類の文型にすべて当てはまる〔第 2 文を

(N)P~NPPNP~(N)P とするのは上記のようにこの文を<it...that>の論理形式と考えたことによる〕。すなわち、それぞれ順に②・③・⑥・①・⑬・①・③・⑤・⑤・①・②・①までは該当するが最後の NPNNPP は上記⑬を新たに設定する必要もでてくる。ただし、このパラグラフ全体を数配列に変換すれば (0100110110, (0)101101(0),0110101,0101,(0)1010,01010011)となり 0 か 1 にすべて収まるわけで問題はない。

ほんの数例のみを見たがそもそも *Basic English* は述語論理的な繫辞(Copula)の<BE>により N と P を論理的に結びつけていく傾向が強い構造をもっていると言える。生成意味論における語彙概念構造(Lexical conceptual structure: LCS)的な表記からは<BE-WITH>の言語と言えよう。これは *Basic English* が接辞の-ed, -ing に強く依存していることも大きく関わっているが、文の N の特質・性質・状態を P と結びつける述語論理学の基本的考え方がよく示される。叙法(Mode / Mood)の観点からは客観的な直説法(Indicative)の命題は It is that..., 主観的な叙想法(仮定法)(Subjunctive)の命題は It seems that...とそれぞれ表層上の論理式として形式化できる。前者は「x は客観的事実として真である」の意味で、後者は「x は主観的仮定として真・偽は定かでない」の意味である。いずれにせよ N, P をそれぞれ 0, 1 と考える 2 進法による英語文の見方は伝統的な C.T.Onions の品詞論的な分類文法による 5 文型とはまったく異質のものということになる。帰納法的に本質をとらえるため事柄を記号化し

一般化する科学として記号論理学や数学があるが、2進法と述語論理を絡めた英語の文整序法の見方は簡素であり本質面に触れることにつながる。これは入門期以降に現実的に直面する幅広い英語文の取り扱い上からも手早いし第一節で触れた文の流れを予測しながら実践するサイトトランスレーションなどの導入の際にも有益となろう。指示対象 N と述語 P との論理関係に鋭くなるはずだからである。

あとがき

外国語は入門や初級程度のレベルまでは学習意欲ももたれるが一般にはそれ以降に挫折をし中級、上級から使えるレベルまで継続学習されることの少ないのが実情である。本稿では入門期より事実上もっと問題となろう入門期以降の取り扱い方とともに、*Basic English* 美学のさらに新たな見方を示唆した。外国語は入門期には徹底的にその言語のもつ音韻的な特徴を把握するというほぼこの1点のみに集中するのがその後のために手早いという筆者の持論からすれば入門期での取り扱いはかなりの的の定まったものと考えている。問題は仮にどんなに優れた教授法によれども必ず入門期ですでに興味を失う非常に多くの学習者が出るという実情とその現実的な取り扱いであろう。本稿は昨年度発刊の *GDM News Bulletin* (No.61) で論じた拙稿「入門期の英語と *Basic English*」(pp.28-38) と一対をなすものと考えている。今回は第一節では軽く触れ第二節で論旨を理論化した。“Function and Concept” 「関数と概念」という考え方を導

入した G.Frege やそれを継承したその後の B.Russell らの2値的(two-valued)な述語論理学と、つい最近イ・サンドの提唱した2進法による英語の統語法分析が、彼自身はこの点にまったく触れてはいないが結びつく気がする。このあたりは特に入門期以降の英語やそのなかで執拗に核として位置づけたい高尚で難解な *Basic English* の理論体系に対する理解を深めその使い方にも習熟することにつながると考える。

(元名古屋市立大学教授)

参考文献

- Frege, G.(1891) “Function and Concept,” in B. McGuinness (ed.), Gottlob Frege, *Collected Papers on Mathematics, Logic, and Philosophy*, 134-156. 藤村龍雄 (訳) 『フレイゲ哲学論集』1988. 岩波書店
- 後藤 寛(2009a) 「入門期の英語と *Basic English*」 *GDM News Bulletin*. No.61. pp.28-38. GDM 英語教授法研究会
- 後藤 寛(2009b) 『基本語で考える英文整序法：語配列の手順』松柏社
- 後藤 寛(2009c) 「*Basic English* と音声：聴覚神経レベルからのアプローチ」日本ベーシック・イングリッシュ協会研究紀要 No.16. pp.8-21.
- イ・サンド(Lee Sang do) (2008) リチャード・キム (訳) 『英語のコードを解く：閉ざされた英語の秩序を開く』三修社
- イ・サンド(Lee Sang do) (2009) リチャード・

キム (訳) 『In がわかれば英語が見える』三
修社

末永國明・他(2007) *Powwow English Writing*
文部科学省検定済教科書 (高等学校外国語科
用), 文英堂

わたしの好きな中級教材(1)

片桐ユズル

English Through Pictures, Book 2 の最初
の19ページは旅への誘いです。旅行にもって
いく物を bag に入れ, taxi で駅へ行くと waiting
room で待ちます。How much was the ticket?
Did you have a good journey? Let me have
your bag, please, などとさりげなく旅行のと
きのことばが出てきます。旅先からの郵便を手
がかりに, letter writing の仕方が紹介され,
Mrs. Smith はそれを受け取って, She is
reading it now. 字が読めるということは実は
大変なことです。Reading and writing are
parts of our education. At school, Tom and
Jane are learning. Tom is writing the word
learning on the board. The teacher is
teaching him the word *learning*. これでつい
に 5文型が出そろいました。これからは I
gave you the ticket でも, She sent me a card
でもいえるのです。しかも send と let の導入
によって BASIC の16動作語が, seem をのぞい

高梨健吉(1985) 『英語の先生, 昔と今: その情
熱の先駆者たち』日本図書ライブ

て, すべて使えるようになりました。というわ
けで, ここで羽をのばして, EPの外へ出てみた
くなりませんか?

さっそく目の前にお花畑が広がり, ミツバチ
が飛びまわっています。Some of these flowers
have bright colors.

"Are these bright colors a help to bees?"
This question came to Karl von Frisch, a
great man of science, who got Nobel Prize in
1973. How was he able to put the question to
the bees? "Do you, my dear bees, see colors
in the same way as we men and women do?"
It was no good saying this to his bees. Bees
have no English.

そこでカール・フォン・フリッシュは色カード
の上にミツをおいて, どの色の上にハチが来る
かを試すのが, *True Stories about Bees* (GDM
Publications)です。しばしばわたしたちは科
学があたえてくれた結論の knowledge だけ
を知って, それを科学だと思いこんでいますが,
じつはそれにいたるプロセスが科学なのです。
カールは雑多な色を同時に提示したのではなく
て, たとえば青と赤だけの対比にしばらくという

ことをしました。わたしたちが GDM でやって
いるように、

I am here.

He is there.

ではなくて、

He is here.

He is there.

のように他のすべての条件を同一にしておいて、
1箇所だけ異なる、ミニマルペアを作りました。
その過程に参加させられることが面白い
stories となるのであって、 knowledge about
bees ではないのです。

(京都精華大学名誉教授)

◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2008年8月～2009年7月)

■2008年

8月14日～17日

夏期英語教授法セミナー YMCA 東山荘

9月27日

月例会 田道住区センター

デモ where (rel.) EP2,16

黒瀬 るみ

トーク 授業の準備はワークシート作りから始めよう

新井 等

10月25日

ベーシック・イングリッシュ研究大会/月例会 三田福祉会館

デモ the same, different

竹内 久枝

講演 ベーシック・イングリッシュ これからの可能性

相沢 佳子

講演 Basic English と English の接点を求める

後藤 寛

11月29日, 30日

秋のセミナー/月例会 オリジナル記念青少年総合センター

11月30日

デモ rate (EP2,129)

佐藤 正人

デモ sort, different, the same (EP1,106-7)

唐木田照代

12月27日

考える力を育てる入門期の英語指導法セミナー/月例会 三田福祉会館

デモ take

宮下 玲

トーク 生徒の学びと GDM

磯野 秀仁

■2009年

1月24日

月例会 神奈川県民センター

デモ comparison (near, far を中心に)

猪俣 徳枝

トーク GDM と絵力

石井 恵子

2月7日, 8日

BE ワークショップ/月例会 フォレスト本郷

デモ Riverside Farm (LEL)

加藤 准子

トーク EP2 終了後の授業案

黒瀬 るみ

3月28日

月例会 パルテノン多摩

デモ change (EP2,69-71)

多羅 深雪

4月25日

月例会 田道住区センター

デモ seem

植田 恵子

トーク Learning Basic English gives us a New Outlook 牧 雅夫

5月9日	月例会 デモ トーク	神奈川県民センター make 大学入試は“直読直解”へ	大野 晴美 中山 滋樹
5月30日, 31日	発音ワークショップ	国立オリンピック記念青少年総合センター	
6月24日	第52回 GDM 英語教授法公開講演会	すみだ産業会館	
	1. 授業実演 英語以外の外国語 1時間目 2. 講演 GDM の仕組みと授業展開 3. 授業体験 1) 単数から複数へ 2) 時の認識を養う (go を中心にして)		唐木田照代 佐藤 正人 服部 正子 竹内 久枝
7月11日	月例会/総会 デモ	田道住区センター Questions (EP1,30)	菅生由紀子

◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2008年9月~2009年8月)

■2008年

9月27日	月例会 デモ	大阪市立総合生涯学習センター “a”と複数(EP1,8-13) one, the other (EP 1,40)	藺村 拓 山崎 典子
	読書会 発音トレーニング	『書き・話す英語のキーワード 850』 “Talk in Basic English”	
10月26日	月例会 デモ	大阪市立弁天町市民学習センター of (EP1,26,27) may (EP2,63,87)	松浦 尚子 麻田 暁枝
	読書会 発音トレーニング	『書き・話す英語のキーワード 850』 “Talk in Basic English”	
11月24日	初級セミナー	大阪市立総合生涯学習センター	
12月14日	月例会 デモ	大阪市立総合生涯学習センター “What?” (EP1,30) to 不定詞	松浦 尚子 此枝 洋子
	読書会 発音トレーニング	『書き・話す英語のキーワード 850』 “Talk in Basic English”	

■2009年

1月24日	月例会 デモ	大阪市立総合生涯学習センター the same, different (EP1,106,107)	松川 和子
	読書会 発音トレーニング	『書き・話す英語のキーワード 850』 “Talk in Basic English”	
2月15日	月例会 デモ	大阪市立総合生涯学習センター have (EP 1,42) come into, out of, through (EP 1,60,63)	山崎 典子 藺村 拓
	読書会 発音トレーニング	『書き・話す英語のキーワード 850』 “Talk in Basic English”	

3月14日,15日	初級・中級セミナー デモ トーク	in KYOTO / 月例会 go (EP1,29) ワークシートは授業の柱	ザ・パレスサイドホテル (京都) 宮下 玲 新井 等
4月25日	月例会 デモ 読書会 発音トレーニング	大阪市立総合生涯学習センター Which (EP 1,48) who (EP,111,112) <i>The ABC OF Basic English</i> by C.K. Ogden "Talk in Basic English"	山崎 典子 河村有里子
5月23日	月例会 デモ 読書会 発音トレーニング	大阪市立総合生涯学習センター which (EP 1,50) see (EP1,41) <i>The ABC OF Basic English</i> by C.K. Ogden "Talk in Basic English"	山崎 典子 松浦 尚子
6月27日	GDM 公開セミナー 『英語ノート』を使うための基礎・基本 外国語体験・授業体験およびトレーニング・ビデオ紹介	in Osaka 大阪市立総合生涯学習センター	
7月5日	月例会 デモ 西日本支部総会	大阪市立総合生涯学習センター come (EP 1,60) have (EP1,42)	山崎 典子 麻田 暁枝
8月14日～17日	夏期英語教授法セミナー	日本YMCA 東山荘	

◆◆◆編集後記◆◆◆

本号の Bulletin は日本ベーシック・イングリッシュ協会と GDM 英語教授法研究会の合同発行です。ベーシック協会は 2009 年 10 月 24 日三田福祉会館での総会において、2010 年 4 月より GDM 英語教授法研究会と合同することを決定しました。

その結果としての最初の Bulletin になるわけですが、二つの会の名前をつなぎあわせると長たらしいものになるので困ります。わたしの計算によると、ベーシック会員 72 人のうち、46 人はすでに GDM 会員でありましたから、純粋ベーシック会員は 26 人。このうち約 20 人が GDM に合流なさいます。この方々のご意向をお聞きしたいものです。

Bulletin, No.1 は 1957 年 6 月に最初の公開講演会にあわせて発行されました。以来 GDM がもっとひろがってほしいとのねがいをわたしたちはもちつづけてきました。しかし実は自分たちが思っているよりはずっとひろがっている事実には気がついていないのではないのでしょうか？ 特に中学・高校の学校現場でひろがってほしかったのですが、それが今ほどひろがっていたときは今までになかったのです。さらに小学校での問題解決の手助けにもなりつつあります。そのような実践報告と、現場での適用のあれこれの知恵で今回の Bulletin はいっぱいです。

(ユズル)

GDM英語教授法研究会

1. 目 的

I. A. Richards と C. M. Gibson によって開発された、外国語としての英語教授法、Graded Direct Method によって、日本人の生徒に英語を教える方法、および関係のある理論などを研究し、ひいては日本の英語教育の改善に貢献する。

2. 沿 革

- ・第二次世界大戦中、一時帰国中の東京女子大学教授 Constance Chappell 女史が、Harvard 大学で I. A. Richards のもとで Graded Direct Method を学んだ。
- ・1947年、Chappell 女史帰国。東京女子大学卒業生の子供たちのクラスをこの教授法で教えたのが、日本におけるGDMの誕生である。
- ・そのクラスを見学していた吉沢美穂ほか数名が、同女史の指導のもとにGDMによる授業を始めた。
- ・1950年、I. A. Richards 来日。
- ・1951～1952年、吉沢美穂、Harvard 大学に留学、I. A. Richards, C. M. Gibson のもとで1年間GDMを研修。
- ・1952年、第1回のGDM講習会を開催。以後毎年講習会を開き、これが現在の Summer Seminar に発展した。
- ・月例研究会もこの頃から始まり現在も続いている。研究会発足当時は、少人数の自然発生的な集まりであったが、会員も次第に増加して、1957年に第1回の Bulletin 発行の頃までには、事務局、会計、プログラム委員などが必要になり、会としての形を整えてきた。
- ・1958年、一般の人々を対象とした広報活動として第1回公開講演会を開催。以後毎年1回開催し、2008年で51回となった。
- ・1965年、会員の片桐ユズルが東京から神戸に転じたのを機会に、関西支部が結成された。以後、本部をおかないまま、東日本支部と西日本支部として活動。
- ・1981年、吉沢美穂死去。(11月29日)
- ・1990年、GDMによる日本語テキスト『はじめてのにほんご』を大修館書店より発行。

3. 組織・運営

- ・英語を教えている人、および英語を教えることに興味のある人は誰でも入会できる。
- ・年会費（9月から翌年8月まで）は 6,000円。
- ・入会するためには、姓名、住所、勤務先などを書いて、年会費とともに、希望する支部の事務局に届け出る。
- ・会員には Bulletin、Newsletter、会員名簿（年1回発行）、会合やセミナーの通知、出版物の通知などを送る。
- ・2010年4月現在の会員数は、各支部合計で約150名。
- ・全国に会員がいるので事務取扱の都合、および会合などの便宜上、日常の活動は、東日本支部と西日本支部に分かれて行なっている。
- ・特に正式の会則などは定めず、会員全員が平等の立場で研究や活動しているし、会員以外の人が活動に参加することも自由である。
- ・ただし、会の運営に必要な最小限度の係を選出し、選ばれた人は、1年間無報酬で奉仕している。係の責任者は、必要に応じて、その仕事を助ける人を依頼することもある。係の種類は現在、次の通りである。

会の代表者、事務局、庶務、会計、記録、月例会、Newsletter、
公開講演会、各セミナー、発音ワークショップ、Bulletin、出版、広報

4. 活動

- ・研究会全体としての活動

(1) Summer Seminar

沿革で述べたように、1952年以来、毎年1～2回この教授法を知らない人のための講習会が行なわれている。1週2時間程度で数週間で終わる形から、1週間毎日連続で集中的に行なう形になり、1968年から5日間泊り込みのセミナーに発展したのが、このセミナーである。御殿場で開くようになってから2010年で42回目である。

また、初級セミナー・中級セミナーが年間数回、東京、名古屋、京都などで開かれている。

なお、1975年以降、1989年まで、兵庫県六甲山頂の大阪YMCA六甲研修センターで、3月末に3泊4日の Spring Seminar が開かれている。

(2) **Bulletin 「英語教授法通信」**

1年に1回発行する会報で、論文、会員の消息、各支部の報告などをまとめている。2009年までに61号出している。

(3) **Publication**

授業技術に関する指導書、会員による研究発表、生徒のための **reading material**、**workbooks**などを印刷して、実費で会員および希望者の用に供している。

・東日本支部の活動

(1) 月例研究会

毎月1回、2～3時間程度の研究会である。

プログラムは、原則として、**demonstration** と **discussion** および講演または研究発表の2本立てである。

(2) **Newsletter**

原則として毎月1回発行。

内容は、月例会の記録、次の月例会の通知、その他の連絡事項など。

(3) 公開講演会

GDMの理論と実際を広く一般に公開し、英語教育全体を向上させる機会にするために、毎年1回開いている。2010年で53回。

・西日本支部の活動

(1) 月例研究会

プログラムは東日本支部と同じ。

(2) 西日本支部ニュース

毎月1回発行している。内容は、会合の報告、通知などの他、会員から寄せられる感想文、読書指導など。

(3) 教材、資料の頒布

(4) **Teachers' Training Seminar**

大阪、広島、名古屋、神戸、奈良、京都など西日本支部に属する区域で随時行われている。

(5) 公開講演会

東日本支部と同様、プログラムは、いずれも公開授業と講演またはパネル討論である。

(6) 以上のほか自発的な研究グループがいくつかあり活動している。

GDM英語教授法研究会

東日本支部事務局

〒226-0005

神奈川県横浜市緑区竹山 3-1-8-3102-233 加藤准子方

TEL/FAX 045-934-8314

西日本支部事務局

〒567-8578 大阪府茨木市宿久庄 2-19-5

梅花女子大学短期大学部 英語コミュニケーション学科

此枝研究室内

TEL 072-643-6221 (大学)

※なお、上記事務局へのお問い合わせはできるだけハガキか封書で
お願いいたします。

パソコン通信・インターネット・ホームページアドレス

東西の合同ホームページ www.gdm-japan.net がオープンしま
した。

GDMの考え方や、各種勉強会などが紹介されています。